

# 札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる 障がい学生支援の取り組みの成果と課題(2)

——聴覚障がい学生に対する情報保障の実態と課題——

The Achievements and Problems in the Progress of the Barrier-Free Committee at  
Sapporo Gakuin University (2)

新國三千代<sup>★1</sup>, 滝沢 広忠<sup>★2</sup>, 松川 敏道<sup>★3</sup>

## 1. はじめに

前著「札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる障がい学生支援の取り組みの成果と課題(1)——バリアフリー委員会の経緯と取り組みを中心に——」<sup>(1)</sup>で紹介したように、2006年度には聴覚障がい学生が9名と約2倍に増え、情報保障支援を利用した学生も8名になった。その後も2008年度まで情報保障支援を利用する学生は毎年8名で、この10年間で最も多い状況が続いた。

情報保障とは、「通常の音声によって伝えられる授業の情報を受け取ることが困難な聴覚障がい学生に対して、ノートテイクやPCテイク、手話などの手段を用いて授業を聞く権利、授業に参加する権利を保障する」ことを言う。本学では、主にノートテイクとPCテイクを用いて情報保障支援が行われている。

2006年度に情報保障を担うテイカーを配置した講義のコマ数は、前期が76科目1,456コマ、後期は82科目1,268コマ、合計158科目、2,724コマであった。2007年度のテイカー配置講義のコマ数は、前期が71科目約994コマ、後期は55科目、約770コマ、合計126科目約1,764コマと前年度に続いて多かった。テイクを付ける授業が大幅に増えたことから、

2007年10月に聴覚障がい学生が履修する科目を担当する教員を対象に「聴覚障がい学生に対する情報保障に関するアンケート調査」を実施した。調査の目的は、聴覚障がい学生に対する情報保障の実態を把握し、課題を明らかにすることである。4年前の調査ではあるが、今でも通用するテーマを含んでいる。

本稿では、本調査に基づき聴覚障がい学生に対する情報保障の実態と課題を紹介する。

## 2. 調査の概要

調査対象、調査期間、調査方法、調査内容は次の通りである。

調査対象：2007年度前期にテイカーを付けることを希望した聴覚障がい学生8名（人文学部人間科学科5名、社会情報学部社会情報学科2名、法学部法律学科1名）が履修する科目（71科目）を担当する教員41名（非常勤含む）。

調査期間：2007年10月1日～10月20日。

調査方法：文書およびメールでアンケート用紙を配布。

調査内容：新國と松川および井上寿枝（教務課）の3名で調査項目を検討し、調査票（資料1）を作成した。質問内容はⅠ～Ⅷの8項目である。各授業形態別に配慮や工夫を問う質問（Ⅰ）については、抽象的に尋ね

★<sup>1</sup> NIKKUNI Michiyo 札幌学院大学人文学部こども発達学科

★<sup>2</sup> TAKIZAWA Hirotsada 札幌学院大学人文学部臨床心理学科（2011年3月迄）

★<sup>3</sup> MATSUKAWA Toshimichi 札幌学院大学人文学部人間科学科

ても回答し難いことから、具体的な事例を  
 列挙して選択する形にした。事例について  
 は、白澤麻弓氏（筑波技術大学）が筑波大  
 学時代から実施されていた情報保障に関す  
 る調査の調査票や回答などを参考にさせて  
 いただいた。

質問内容は次の通りである。

- I. 講義／演習／実習／ゼミの場合やビデオ教材を用いる場合それぞれについて、聴覚障がい学生の受講において配慮または工夫したこと。

【通常の講義の場合】

1. できるだけレジュメを準備する
2. 大きくはっきりと、聞き取りやすい声で話す
3. 極端に早口にならないようにする
4. 口元が隠れないように注意する
5. 専門用語や聞き慣れない単語を板書する
6. 時々障がい学生やテイカーの様子を見る
7. 時々間をあけながら話す
8. 流れがわかる程度に板書する
9. テキストを用いるときには通訳者用のテキストを準備する
10. 数式など、あらかじめ板書に書く内容が決まっているときにはそれをコピーして渡す
11. OHP やパワーポイントを用いるときには原稿のコピーを用意する
12. 資料の説明のさいは該当箇所をはっきりと示す
13. テイクに都合の良い席を優先させる
14. テイカーが説明を聞き取ることができるよう静かにしてもらう
15. 図表はレジュメに掲載しておく
16. できるだけ指示語ではなく具体的に言葉で説明する
17. テイカーなどの通訳者に事前に内

容を伝える

18. 視覚教材を多く用いる
19. 他の学生とは別に参考文献を紹介する
20. 特に配慮はしていない  
 （その理由： ）
21. その他 具体的に（ ）

【ゼミ／演習／実習の場合】

1. 通訳者分のレジュメを用意する
2. 大きな声ではっきり話すよう学生に促す
3. 声が小さい時や早口などで聞き取りにくいときは、はっきり話すよう学生に注意する
4. テイカーが通訳しやすいように、学生の発言内容が曖昧なときには整理して言い直す
5. 時々論点を整理する
6. 複数の発言が同時にあった場合は、一人ずつ順に話すように促す
7. 議論のペースが速いときには調整する
8. 見学などでテイクが難しいところには手話通訳をお願いした
9. 特に配慮はしていない  
 （その理由： ）
10. その他 具体的に（ ）

【ビデオ教材を用いる場合】

1. ビデオを使うことをテイカーと障がい学生に事前に連絡する
2. 教室を暗くするときには通訳の部分に照明を用意する
3. 聞き取り易い音量に調整する
4. ビデオと同時に話さない
5. タイトルと内容を簡単に説明してから放映する
6. 字幕をつける
7. 内容をまとめたレジュメを渡す
8. 配慮はしていない  
 （その理由： ）

9. その他 具体的に ( )
- II. 講義／演習／実習／ゼミ等において、聴覚障がい学生が受講しているとき、困ったことや難しいと感じたこと。
- III. 担当するにあたって事前に把握したいこと。
- IV. 聴覚障がい学生に対する要望。
- V. 情報保障を支援しているノートテイク／PC テイク／手話通訳の学生に対する要望。
- VI. 聴覚障がい学生が受講している科目と聴覚障がい学生が受講していない科目との違い。
- VII. 聴覚障がい学生の座席について。
- VIII. バリアフリー委員会および本学の支援体制に対する要望。

### 3. 調査結果

2007 年度前期にテイクが配置された科目 (71 科目) を担当している教員 41 名 (非常勤含む) に調査票を配布し、34 名の教員 (43 科目担当者：複数科目の担当有, 非常勤 4 名) から回答を得た (回収率 82.9%)。授業形態別に回答科目数を集計した結果は表 1 の通りである。大教室を使用しながらゼミの項目に回答していたもの、使用教室が不明の講義で通常授業とゼミの両方に回答があったもの、聴覚障がい者ではなく外国人留学生に対する配慮として回答していたものは除外して整理した。

表 1 回答者の授業形態種別

授業形態	科目数
教育実習	1
ゼミ形式 (卒業研究, 卒業論文含)	6
小教室講義 (50 名内)	6
中教室講義 (100～150 名以内)	3
大教室講義 (150 名～)	21
不明 (匿名のため未確認)	6
合 計	43

\* 複数科目担当している教員がいるため教員数より多い。

各質問毎の調査結果は次の通りである。

#### I. 講義／演習／実習／ゼミの場合やビデオ教材を用いる場合それぞれについて、聴覚障がい学生の受講において配慮または工夫したこと。

##### 1) 通常の講義

聴覚障がい学生に対する配慮または工夫していることは、表 2 の通りである。

大教室での講義科目が半数を占めたこともあるが、聴覚障がい学生に対するさまざまな工夫をこらしていることがわかる。最も多い人は 9 項目に○をしている。「聴覚口話 (法) を意識して、口形をはっきりさせ、大きな声でゆっくり話す、レジュメを用意したり、専門用語を板書する、時々聴覚障がい学生やテイクの様子を見る」などといった配慮がみられた。

##### 2) 教育実習の場合

教育実習で聴覚障がい学生を指導した教員は 1 名であるが、「2. 大きくはっきりと、聞き取りやすい声で話す」「3. 極端に早口にならないようにする」「4. 口元が隠れないように注意する」「7. 時々間をあげながら話す」「8. 流れがわかる程度に板書する」の項目を回答していた。

##### 3) ゼミの場合

ゼミ (卒業論文指導を含む) を担当した教員は 5 名 (6 ゼミ) であった。回答結果を表 3 に示す。

基本的には講義と同様であるが、少人数ということで論点を整理したり、議論のペースを調整するなど配慮している様子がうかがえた。

##### 4) ビデオ教材を用いる場合

ビデオ教材を用いる場合については、表 4 のような回答が得られた。

表2 通常講義で聴覚障がい学生に対する配慮または工夫していること（多い順）

選択肢	配慮または工夫していること	頻度
2	大きくはっきりと、聞き取りやすい声で話す	22
3	極端に早口にならないようにする	18
1	できるだけレジュメを準備する	17
6	時々障がい学生やテイカーの様子を見る	16
7	時々間をあげながら話す	12
5	専門用語や聞き慣れない単語を板書する	8
11	OHP やパワーポイントを用いるときには原稿のコピーを用意する	7
13	テイクに都合の良い席を優先させる	7
15	図表はレジュメに掲載しておく	7
4	口元が隠れないように注意する	6
8	流れがわかる程度に板書する	6
21	その他	5
10	数式など、あらかじめ板書に書く内容が決まっているときにはそれをコピーして渡す	4
18	視覚教材を多く用いる	4
12	資料の説明のさいは該当箇所をはっきりと示す	3
16	できるだけ指示語ではなく具体的に言葉で説明する	3
14	テイカーが説明を聞き取ることができるよう静かにしてもらう	2
20	特に配慮はしていない	1
9	テキストを用いるときには通訳者用のテキストを準備する	0
17	テイカーなどの通訳者に事前に内容を伝える	0
19	他の学生とは別に参考文献を紹介する	0

表3 ゼミで聴覚障がい学生に対する配慮または工夫していること

選択肢	配慮または工夫していること	頻度
2	大きな声ではっきり話すよう学生に促す	6
3	声が小さい時や早口などで聞き取りにくいときは、はっきり話すよう学生に注意する	6
5	時々論点を整理する	4
7	議論のペースが速いときには調整する	3
8	見学などでテイクが難しいところには手話通訳をお願いした	2
10	その他	2
1	通訳者分のレジュメを用意する	1
4	テイカーが通訳しやすいように、学生の発言内容が曖昧なときには整理して言い直す	1
6	複数の発言が同時にあった場合は、一人ずつ順に話すよう促す	1
9	特に配慮はしていない	0

表4 ビデオ教材を用いる場合配慮していること

選択肢	配慮していること	頻度
5	タイトルと内容を簡単に説明してから放映する	6
3	聞き取り易い音量に調整する	5
4	ビデオと同時に話さない	5
1	ビデオを使うことをテイカーと障がい学生に事前に連絡する	3
7	内容をまとめたレジュメを渡す	2
8	特に配慮はしていない	2
2	教室を暗くするときには通訳の部分に照明を用意する	0
6	字幕をつける*	0
9	その他	0

\*調査当時は字幕入れは実施していなかった。



タイトルと内容を説明してから放映する、音量を調整する、ビデオと同時に話をしない、などの配慮がみられた。なお、字幕をつけたり、照明の配慮をしたものはこの段階ではなかった。ビデオ教材の字幕入れは2007年度までは試験的にしか行われていなかったが、2008年度から電子計算機センターのサポートデスクで本格的に字幕入れを開始した。その後、150本を越えるビデオ教材に字幕を入れている。字幕入れにより、ビデオ教材に対する情報保障が改善されると共にテイクや授業担当教員の負担も大幅に軽減した。

## II. 講義／演習／実習／ゼミ等において、聴覚障がい学生が受講しているとき、困ったことや難しいと感じたこと。

概ねノート／PC ティカーの学生が熱心に取り組んでいることを評価しており、特に困っていない、という意見が多かった。そのためには事前に聴覚障がい学生がいるという連絡を怠らない配慮が必要である。ここで指摘された問題や見解には次のようなものがある。

- ・ 困難度を把握しないまま、ティカーがいるということで安心してしまいう状況がある。
- ・ ティカーはあくまで情報保障を担う役割をしているだけなので、教員と聴覚障がい学生（一般学生も含めて）との対話が必要である。
- ・ ティカーはチューターではない、つまり、勉強を教える人ではないが、そのことを理解してもらう必要がある。
- ・ 聴覚障がい学生が、どのくらい聞きとれているのか、あるいは聞き取れていないのか把握できずに戸惑っている状況がある。教員も学生に聞きにくいし、学生も聞き取れなくても質問しにくい状況があるのではないかと思われる。質問したいことが沢山あるはずなのに、なかなか言い出せない学生もいるのではないかと懸念している教員もい

る。

- ・ 授業内容をどの程度理解しているのか分からず不安を抱いている教員がいる。ビデオ教材を使用したときの理解度について心配していた教員もいた。（筆者：これは字幕が普及すれば解決される問題である。字幕入れが実現した2008年度以降はかなり改善されている。）
- ・ 授業のペースについて戸惑いを感じている教員がいるが、繰り返しや強調が他の学生にとってもメリットになるという側面も認識されている。（筆者：前者については、ティカーの力量にもよるが、適宜テイク結果をご覧いただくと、どの程度フォローされているかを把握できる。そこから、ペースをつかむことができると考えている。）
- ・ 情報を的確に通訳しているのかどうかというティカーの資質を問う意見があった。コンピュータ関係のゼミでPCテイクに卓越している学生にテイクをお願いしがちになることを反省している教員がいたり、専門に精通しているティカーを配置した方がよいのではないかと教員もいた。
- ・ ティカーがいるため、聴覚障がい学生がクラスメートと関わりにくい、他の学生とのコミュニケーションがとり難くならないか、それを心配する教員がいる。PCテイクであれば無線LANを使用することで、両脇に座らず離れた場所から情報保障することも可能である。実際に、ゼミの授業でこのような方法を採用したこともある。
- ・ グループ討議における情報保障のむずかしさを感じる教員がいる。
- ・ 語学の授業でリスニング教材を使用するときにはどのように対応したらよいのか、問題として指摘する教員もいるが、検討が必要な課題である。

なお、参考まで本質問の回答を次に列挙する。

- ・ ティカーの人たちがよくやっていたと思

ます。困ったことというのはとくにありません。(3件)

- ・彼らは、それぞれにコミュニケーションツールを確立していますので、特別困ったことはありません。どうしても意思疎通は図れなかった、とうことありません。必要に応じて、メールで資料を配布したり、プレゼンの資料の文字を大きくしたりすれば、テイカーのヘルプもあり、十分に授業を理解してくれますし、試験結果なども他の学生と全く差がありません。
- ・特に難しいと思ったことはありません。と言うのは、私の講義の最大の欠点(早口であること)は通常の学生からも文句を言われることなので、それが障害のある学生だけに特に問題になるとは思えないからです。
- ・今のところ、特に困った事はありません。ただ、ノートテイカーの学生が開始前に着席して待っているのに、当の聴覚障がい学生が、授業に遅れて来ることが一度ならずあったので、その時は注意しました。もちろん、本人もそれが良くないことは理解し、すぐに改めました。
- ・特にありませんが、そうした学生の存在を常に意識し、彼らに対して不利益をもたらしていないかを絶えずチェックするというのが、少なくとも私にとっては難しかったです。
- ・直接関係ないかも知れませんが、テイカーが学生の両脇に座ることで、その学生のクラスメートとの関わりが若干希薄になるような気がして、気になっています。普通、友達同士で座って何気ない会話をしたりしますが、そのようなことが出来にくいように思います。ご本人たちが気にしていないのであれば、私が気に病むことではないのかも知れませんが。
- ・講義においては、その(専門)分野にある程度精通しているテイカーを配置した方が

よい。ただノートを取るだけではなく、その場で障がい者に少し説明もできる方がよいと思われる。(筆者：説明については情報保障の仕事の域(テイカー)を越えているというのがバリアフリー委員会の見解である。テイカーはチューターではなく、音声情報を伝える役割をする者と位置付けている。)

- ・少人数の講義なので、時々理解できたかどうかの確認をして進めています。
- ・どの程度伝わっているか把握することが難しい。
- ・授業当初は注意するのですが、途中で難しくなることがしばしばです。途中で余談などのとき、テイカーが全てもらさないように書き取っているのに気づくと気の毒になります。(筆者：テイカーはそれが仕事なので、とにかく漏らさず伝えようと必死でやっている。)
- ・ペースをどれくらいにしたらいのかで迷う。
- ・半年が過ぎ、失敗・反省の繰り返しです。ゼミ室の整備(ノートテイカー二人分を含む席の確保、PC設置、ノートをゼミ室に多数置くなど)は配慮しましたが、写真を見せながらの話し、板書のときの措置など、反省が多い。他の学生とのコミュニケーションに一番気をつけていますが、学生たちが解決していく様を見えています。
- ・あらためて考えると講義担当者として何か困るということはありません。しかし、そのこと自体が問題なのかかもしれません。とにかく情報が的確に通され十分に伝わっているかどうかが一番の問題なので、そうできていないとすれば何が問題なのか、どのような配慮をすれば改善されるのかといったことが個別の状況に対して具体的に把握できていないとあらためて感じます。そのあたりがきちんと把握できると、講義担当者としてここが困るとか難しいとかが

自覚できるのだらうと思います。

- ・聴覚障害の度合いは恐らくかなり個別的なのだと思うが、実際にどの程度聴こえている／いないのか、あるいは読唇や身振りでの程度伝わったのか／いないのか、なかなか直接学生に聞きにくいこともあって、把握しきれず、戸惑うことがある。また、少し複雑な言い回し（講義）や討論（ゼミ）が求められるときなどに、その内容を複雑さも含めて捉えられたかどうか、懸念が残ることがある。
- ・コンピュータでもの（ソフト）を作るゼミで、毎回経過報告とそれについての質疑応答という形でゼミが進行する。同時に発言するという形ではない。ゼミの学生全員がタッチタイピングできるため同じゼミの学生に交替でPC テイクをお願いした。ほぼ実時間で文字起こしができるため、このような形態のゼミナールでは情報保障については特に問題はないと考える。しかし、PC テイクに卓越している学生にテイクをお願いしがちであったことを反省している。
- ・(1)教員と聴覚障がい学生（以下、対象学生）との間の意思疎通の程度が測れないということがあります。講義中、教員側が話したことをノートテイクの学生（以下、テイク学生）が筆記し、それを対象学生が読むことになりますが、テイクをした内容について、（それを読んだだけで）対象学生がどれだけ理解できているか、よくわからないという面があります。講義の後で、対象学生がノートを読み返すことがあるのかどうかも知りたいところです。（筆者：ノートを読み返すことはあるようです。）
- (2)我々が当たり前と思っていることの、どの部分が対象学生にとっては困難なのかが把握できないまま講義を行ってしまっていたように思います。対象学生ではなく、テイク学生に説明し、あとはテイク学生

から対象学生への説明に任せ、教員側は何となく安心してしまっているという事実も否定できません。

- (3)あまり対象学生を意識しすぎると、進度が（予定よりも）遅くなったりする可能性はあります。しかし、対象学生やテイク学生を意識した説明の繰り返しや強調が他の学生にとっては「ちょうど良いペース」となっているという側面もあるように感じています。（講義アンケートの結果を見ての感想です。）
- ・授業を準備する上で、事前に教えていただく次助攻ります。またどの程度の配慮を必要とするか、ノートテイクを担当されるかたと連絡を取っておくとか、やはり準備の配慮でしょうか。
- ・できるだけ直接学生と教員が対話する方針である、ということをもノートテイクに指摘されるまで知らなかった。ノートテイクは「通訳」のような存在であると思っていた。
- ・こちらから質問を募るとき、おそらく質問したいことが沢山あるはずなのに、なかなか言い出せていないのを見る時
- ・特に、グループに分けて討論を組織している時、聞き取れるよう保障がグループでなされているか気になる。一部の授業で、テイク学生が手話通訳してくれたが。
- ・図式化しにくい根源的な掘り下げをするのが難しい。表現しやすいことしか話さなくなる。
- ・テキストについているCDを聞く際、聴覚障がいの学生は自分で予習などをして時間を過ごすことになる。リスニング教材は最小限に用いることになり、リスニングに興味のある学生には不本意かもしれない。
- ・ビデオ教材を多く利用する講義なのでビデオの内容をどのように受け取っているのかわからない。（筆者：2008年度からビデオ教材の字幕入力を電子計算機センターのサ

ポートデスクで行っているが、それ以前は聴覚障がい学生にはビデオ教材は大変不評であった。字幕が入ってからは内容がわかると好評である。)

### III. 担当するにあたって事前に把握したいこと。

授業開始前に学部長や学科長名などで依頼文が渡されているので、それで十分、あとは教員の方で個別に対応する(学生の名前と顔が一致するよう工夫するなど)という意見が大半であった。しかし、個々の学生の要望や必要な配慮があれば事前に教えて欲しい、事前に会ってコミュニケーションがとれればなおよいという教員もいた。また、少数意見であるが、中には障がいの程度について把握しておきたいとか、基礎学力(読み書き能力)を知っていれば、講義の説明レベルを工夫するときの参考になるという意見もあった。障がいの内容等を予め知らせてほしいという意見も少なからずあったが、外国語などのクラス分けが授業開始直前に決まるような場合が該当すると思われる。これについては、できるだけ早い段階で知らせるように改善した。また、テイカーの仕事や役割について知らせたいという要望や、聴覚障がい学生の座る場所を予め指定してもらいたいという意見もあった。さらに、ケースバイケースでの判断が必要としながらも、特別扱いすることは本人の今後にとってもよくないのではないかという意見を述べる教員もいた。

ここで挙げられた要望については、例えば、初回の授業開始前に聴覚障がい学生とテイカーが講義担当者に挨拶する、聴覚障がい学生のサポートやノートテイカー/PCテイカーの役割について各期の授業開始前に講義担当者に文書でお知らせする、といった対応をしてかなり改善された。

なお、本質問の回答は次の通りである。

・特にありません。

- ・学部から詳細な依頼文が来ている。それで十分である。
- ・授業開始前に、学部長名でとても丁寧な文書を毎回頂いております。これまで頂いた情報で充分です。後は、その学生の名前と顔が一致できるように、こちらの方で工夫したいと思っています。
- ・難聴学生が履修しているのかどうかだけわかれば、あとは個別に対応する。したがって事前に把握したいということは履修の有無以外には特にない。
- ・「報告」に当たったとき本人がどうするか配慮しましたが、問題なく本人が報告しました。今多少気になるのは卒業後の進路です。
- ・障害者の障害の程度については把握しておきたい(学部で説明等の対応はあると思うが。)
- ・具体的な障がいの程度等
- ・支援をうける学生が存在することを事前に知らせていただければありがたいです。
- ・当の学生の障がいの程度について、確認する機会がない。事前に講義の実施において当人が希望することを知らせてもらおうと心づかいが可能となる。
- ・どの程度のサポートを望んでいるのか、事前に知っておくならよりやりやすくなり。開始前にコミュニケーションをとれるとよりよい。
- ・事前に要望を伝えてもらえれば助かります。私の講義の場合は「ゆっくりはなして欲しい」という要望があり。それ以来、できるだけはやくちにならないよう話すよう意識することができました。
- ・一般的な配慮事項の他、個別に必要な配慮があれば伝えてほしい。
- ・当該学生の名前などは伏せたままでもかまいませんが、どのような障病があり、どのような場合に支障があるのか、をお知らせいただければ、それにおうじてできるだけのことしたいと思います。

- ・口話をどの程度理解できるのか、個々の学生についてわかれば better だと思います。
- ・やはり、どの程度まで聞き取ることができるのか？あるいは読唇術がどの程度身に付いているのか、という事が分かると、対応がしやすいです。また、どの様な点に不安を感じているのか、という点が分かると、何らかの配慮ができるかもしれません。ただ、何でも受け入れるという形での特別扱いをする事は本人の今後にとっても良くないと考えます。一般には、どの様な配慮ができるか、した方が良いかは、ケースバイケースで判断する事になると思います。
- ・当該学生について、何をどの程度配慮したら良いのか、教えて欲しいです。
- ・基本的な学ぶ力（読み書き、計算等）を知ることができると、講義の説明レベルを工夫するときの参考となるように思います。
- ・1) 坐る場所、2) テイカーさんの御都合、3) 喋るスピードの確認、4) 事後の情報交換
- ・毎回どこに座っているかを探さなくてはならず、講義をしながらでは困るときもあるため、定位置に予め座るように指定してもらいたい。たくさんの学生の前で障がいのある学生を移動させなければならないので、私が指示するのには抵抗あります。
- ・テイカーが入るなら、入ることを知らせたいです。過去に、その期の半分を過ぎてから、テイカーの存在に気づいたことがありました。(筆者：テイカーと聴覚障がい学生が最初に挨拶に行くようになってからはこのようなことはなくなった。)
- ・ノートテイカーの役割を細かく知らせて欲しい。担当する学生の状況を事前に詳しく知らせてほしい。(筆者：これ以降、授業開始前に、ノートテイカー／PC テイカーの役割と仕事について教務部長名で授業担当者に文書でお知らせしている。)

#### IV. 聴覚障がい学生に対する要望。

何か（困ることが）あったら遠慮なく相談してほしい、という教員の意見が多かった。教員側にも戸惑いがあり、理解できないところは是非質問してほしいなど、学生の方から積極的に関わって欲しいという気持ちを強く持っていると感じた。教員のこの気持ちは非常によく理解できるが、質問や相談に対して聴覚障がい学生が有する困難性についても教員に知らせておく必要があると考えている。また、質問については、「質問用紙」のようなものを持たせるといいのでは、という意見があった。これについては、実際に授業で取り入れてみたが、その後どの程度活用されているか、調べる必要がある。

その一方で、すべての聴覚障がい学生が必ずしも勉強に対するモチベーションが高いとは限らず、多くを求めている学生もいるとか、主体的なかわりを奨励する意味で、敢えて他の学生と同様に付き合っているとか、あるいは自分のために働いてくれる人（テイカー）に対して感謝の気持ちをもって欲しい、という意見もあった。

なお、本質問の回答は次の通りである。

- ・特になし。
- ・特にありませんが、要望を出していただくことで改善できると思います。
- ・何かあったら何でもまずは相談してみてください。
- ・遠慮せずに、わからないことをきいてほしいと思います。
- ・理解できないところなどは遠慮なく質問して欲しい。
- ・どうぞ遠慮なく、質問や希望を教えて下さい。
- ・理解できる部分、できない部分の意思表示を何らかの形で表現して欲しい。
- ・遠慮なく、質問や苦情をぶつけてもらいたい、ということに尽きます。
- ・何かあったら遠慮しないで聞くなり要求す

るなりして欲しいです。

- ・すべての要望に応えることはできないが、難聴学生自身からなるべく具体的な要望を挙げてもらいたい。
- ・遠慮せずに要望するように最初から言っています。こちらから手を差し出すのは控えています。本人が道を拓かなければならないと考えるからです。普通に、他の学生と同様に、つき合っています。
- ・I. の質問項目にあった1~20までの内で工夫、配慮してほしいものについて学生の方から希望を示してほしい。
- ・これは、本人の意思の問題ではあると思うのですが、もし、可能であれば、授業後にも授業担当の教員に一言、声をかけて欲しいと思います。そうすれば、何らかの配慮を念頭に置きつつ、授業を進められると思います。上記にも書きましたが、学生情報は入るのですが、顔と名前が一致しないので、なるべく早く声をかけて頂きたいと思います。
- ・理想を言えば、理解できないところは是非質問してほしいと思います。しかしながら、これは対象学生の資質に依存するところでもあります。勉学に対するモチベーションが他の平均的な学生達と同じであるならば、対象学生にあまり多くをもとめることも酷かなとも思います。
- ・学生個人としてはがんばっていたと思うが、課題提出に遅刻し、内容も不十分だったため、不合格となった。コミュニケーションをより円滑に図るためにも、「通訳」のような役割の人がいれば有難い。しかし、過去に担当した難聴の学生が優秀な成績を取ったことから、システムの問題より個人の能力か、と思われることもある。
- ・質問II. との関係で、「質問用紙」のようなものを持ち歩いておいてもらいたいかもしれない。
- ・幸い、これまで接した聴覚障がい学生には、

全く問題を感じたことがないのですが、本学の情報保障制度が整備されるにつれて、それが当然という認識を持ってくる可能性があります。これはある意味では社会的な意識の進化という事ができるかも知れませんが、ただ基本は人間と人間との関係です。常に、自分のために動いてくれる人に対する感謝の気持ちは持っていて欲しいと思います。それが情報保障制度をより充実・発展させるキーになると考えます。本設問の趣旨とは外れているかもしれませんが、権利の主張が先行する風潮が今の世の中にはあるので、触れさせて頂きました。杞憂であることを願っています。

#### V. 情報保障を支援しているノートテイク／PC テイク／手話通訳の学生に対する要望。

「よくやっている」という好意的な意見が圧倒的に多かった。むしろ教員に対して要望を出して欲しいという意見がみられた。しかし、テイクする授業に遅刻しないしてほしいとか、テイク同士でおしゃべりをしているのが気になるという意見もあった。影の存在に徹して障がい学生がクラスメートとも積極的に交流できるよう配慮してほしいという意見もあった。

また、予めテイクであることを教員へ伝える方がよい（どこにいるのか分からない、一般学生と間違えて当ててしまった、という例がある）という意見があった。これについては、初回の授業の前に聴覚障がい学生とテイクが講義担当者に挨拶に行くことになってから改善されている。

さらに、「講義の内容にある程度精通した学生を配置してほしいことと、支援する学生は講義内容を同時に履修しているという姿勢で講義に臨んでほしい。」という意見もあり、テイクのあり方について共通認識をもつ必要性を感じた。

固定した位置に座るとか、テイカーであることが分かるように腕章等をつけてくればありがたいという意見もあった。これについて、聴覚障がい学生やテイカーで話し合いをもったが、特別扱いされていると周囲の学生から見られることが気になる、あるいは、障がい者を常に周囲に知らせることに抵抗があるといった意見もあり、合意は得られなかった。障がい理解と啓発に関わる課題であると考えている。

なお、本質問の回答は次の通りである。

- ・特にありません。(5件)
- ・大変有意義なことだと考えています。
- ・対象となる学生の両脇に座って、とても細やかにフォローしている姿が印象的でした。本当に素晴らしい取り組みだと心より思っております。
- ・ノートテイクに専念しているので、それ以上の要望はありません。それ以上のことは私が配慮すべきことと考えています。
- ・よくやっていると思います。要望というよりも、ノートテイカーの学生も当該講義・演習について、自分なりの興味関心を持って参加する、という意味で受講の機会を楽しんで欲しいと思います。
- ・ご苦勞様です。大変だったと思います。こちらでも要望をいただくことで工夫したいと思います。
- ・よくやっていると思う。講義ごとに教員への要望(板書、声)など伝えてくれると有難い。
- ・逆説的だか、むしろこちらへの「要望」をどんどんすべき。
- ・いつも私は早口なのでご苦勞をかけていると思います。ありがとうございます。ただ、テイクする授業には遅刻しないので来てください。
- ・無理とは思いますが、毎回できるだけ最初から居てほしい。途中からだより把握しにくいです。どこにいるのか、いつからい

るのか。

- ・基本的によくやっていると思いますが、授業中にテイカー同士でお喋りしていることがあります。何かを打合わせしたい時、まわりに気を使ってほしいと思います。
- ・大きなお世話かも知れませんが、II. で書いたようなことが私は気になっているので、出来ましたら、テイカーは影の存在に徹し、障害のある学生がクラスメートたちとの交流を積極的に行えるよう、配慮して頂ければと思います。
- ・講義の内容にある程度精通した学生を配置してほしいことと、支援する学生は講義内容を同時に履修しているという姿勢で講義に臨んでほしい。
- ・テイク学生達から見た、講義に対する対象学生の反応や理解度を知らせてもらえると助かります。所属学科が異なっていたり、時間的制約があったりなどで、テイクの学生は、ただ音声で文字にしているだけで精一杯という場合もあるかと思いますので、難しいこととは思いますが。また、ここまで期待すると、ノートテイクという与えられた仕事の範囲を超えるかもしれません。
- ・あらかじめ支援者である旨を担当教員に伝える(あいさつをする)などした方がよいと思います。(筆者：教員からの要望がきっかけとなり、その後挨拶に行くように改善された。)
- ・誰がテイカーの学生かわかるようにしていただければありがたいです(腕章など)。最初のうちは授業中に間違っただけで済みました。(筆者：その後、腕章について検討したが、障がい学生やテイカーからは消極的(反対)な意見が多く、実現しなかった。)

## VI. 聴覚障がい学生が受講している科目と聴覚障がい学生が受講していない科目との違い。

「とくにない」という回答がほとんどであっ

た。中には緊張感があると応えた教員もいる。聴覚障がい学生がいれば、口調、スピード、誤解のないような配慮を行っている教員もいるが、PC の状況、テイカーの準備状況、マイクの音量などを確認しながら、対象学生の存在を忘れて話すスピードを上げていることに気づいたこともあったと回答した教員もいた。また、大切なことは ppt または板書で記述しているという教員もいた。

本質問の回答は次の通りである。

- ・特にありません。(11 件)
- ・とりたてて違いを感じたことはありません。
- ・なし、強いていえば早口にならないように注意した。
- ・全く感じませんでした。私の注意力不足かもしれません。
- ・緊張感
- ・この点はわかりません。
- ・I. でも書いたとおり、自分の講義の欠点を意識し、それを直さなければというプレッシャーがより多くかかります。でも、それは必要なことなので、ありがたいと思っています。
- ・口調、スピード、誤解のないような配慮などを要することがわかりました。
- ・講義実施上の違いで言えば、講義開始時には、対象学生の PC 起動状況、ノートテイク学生がテイクの準備が出来ているかどうか、マイクの音量が適切かどうか（聞き取れるかどうか）を尋ね、講義の進行中は、テイクの学生からテイク状況のサイン（手を振るなど）を送ってもらっていました。時々、対象学生の存在を忘れて、話すスピードを上げてしまっていることにはたと気づいたことはありました。
- ・大切なことは ppt または板書で記述した。

#### VII. 聴覚障がい学生の座席について。

座席を指定しているという回答はなく、回

答したほぼ全教員が本人またはテイカーの希望に任せているようだ。

#### VIII. バリアフリー委員会および本学の支援体制に対する要望。

感謝の言葉や応援したいという励ましの言葉が多くみられたが、いくつか要望もあった。例えば、「ボランティア学生に依存するのではなく、大学としてきちんとした支援体制を作らなければならない(設備も含めて).」「講義だけではなく、講演会やガイダンスでも支援できないのか。(筆者：現在実施している)」「どのようなことに気をつければよいのか分からないので、マニュアルを作成して欲しい.」「取り組みについての情報を共有したいので授業で工夫したことなど積極的に公開して欲しい.」などである。また、「聴覚障がい以外の障がいをもつ学生についての詳しい情報も事前に欲しい」という要望もあった。

本学の取り組みについて評価している教員からは、「障がい学生をもっと積極的に受け入れるようにしてほしい.」「活動について対外的にもっとアピールしてもよいのではないか.」という意見もあった。障がい学生やテイカーからの授業評価や意見を求める教員もいた。これについては、聴覚障がい学生やテイカーに対するアンケート調査も実施しているので、別の機会に紹介したいと考えている。

本質問の回答は次の通りである。

- ・ご苦労さまです。今後も頑張ってください。
- ・札幌学院大学の支援体制には、つねづね感謝しております。
- ・特にありません。むしろ配慮の行き届いた体制に、私自身の意識がいまだ追いついていない状況です。
- ・これ以上何か要望するということはありません。
- ・今後とも、障がいを持つ学生のますますの支援体制が整うことを要望します。
- ・特にありません。バリアフリーの取り組み



- 自体、本当に素晴らしいと思っています。  
これからも応援しています。
- ・大変良い活動をしていると思います。運営を維持するのは大変な事だと思いますが、“自主的”に活動を進めている、という方式(精神)を今後も続けて欲しいと思います。
  - ・ご苦労さまと思いますが、個人的には余り関心がありません。
  - ・対外アピールをもう少し頑張してほしい。大学の大きな特色である。
  - ・アンケートをきっかけに聴覚障がいの学生への授業方法について、意識が高まりました。ありがとうございます。
  - ・I.の様な質問項目を示して下さることは、大変参考になる。何に具体的に気をつければよいか、わかりやすい。(筆者：具体的に配慮すべき事項を示すことの大切さを認識している。配慮依頼文書等にも具体的に配慮等を明示している。)
  - ・バリアフリー委員会は大変良くやって下さっていると思います。この場を借りて、お礼申し上げます。
  - ・委員会への要望ではないかも知れませんが、学部の講演会や、ガイダンスなどの時にも、何らかの形でテイク（や通訳）をつけられるようになってほしいなと思っています。(筆者：現在は、カリキュラムで企画された講演やガイダンスなどについても対応している。)
  - ・支援体制については良く分かりません。すみません。
  - ・大学の取り組みとして重要な作業だと思います。どうか、共通認識に立てるように、情報の共有と工夫の公開などを積極的に行って下さい。
  - ・種々の障がいのある学生の入学を許可している大学であるから、ボランティアの学生諸君に依存するのではなく、大学としてきちんとした支援体制をとるべきである。教育支援だけでなく設備支援等も含めてである。
- ・(1)バリアフリー委員会も含めた学内・学外での学生のボランティア活動を支援する「ボランティアセンター」のような中核機関が学内に無いことは、問題だとつねづね感じています。学生や教職員がそれぞれ個別に対応している状況ですが、全体を統括・連携して円滑にボランティア活動が運営できるような基幹的なセンターを、ぜひとも設置していただきたい。
  - (2)上記の点とも関連しますが、車椅子の学生や視聴覚障害等の学生を、本学として今後どんどん受け入れていく、というほどの積極性は見えないように思います。障害を持ちながら大学に通いたいという希望をもつ方々を積極的に本学に迎えられるような方針を立ててはどうでしょうか。福祉系の大学ではそういうところもあるかと思いますが、総合大学の例はあまりないと思いますので、本学のひとつの大きな特色になると考えます。
  - ・出発当初はいろいろ危惧するところがありましたが、現在に至るまで改善・充実していると考えます。一つ提案があります。講義とゼミの教員担当者に、注意すべきマニュアルを作ってはどうか。簡単なものでいいと思います。今回このアンケートで配慮すべき項目が挙がっていますが、事前に教員に伝わっているのでしょうか。パワーポイント、映像、板書などの際の工夫は意外に難しいことを痛感しています。
  - ・聴覚障がいがの学生やテイクの学生が授業を受けてみて授業の仕方や内容がどうだったのか、伝わってきません。是非担当教員に対して授業に関する評価や意見を知らせて欲しいと思います。
  - ・(1)以前にバリアフリー委員会のノートテイク講習に参加したことは、学生諸君の活動の様子を見る事ができて、教員としても良い経験でした。また依頼があれば、

引き受けたいと思います。

(2)障がいを持つ学生達に講義の受講条件を整えるということは大変重要で意味のあることだと思いますが、教員側の立場から、より多くを学んで欲しいという思いを込めて言えば、本人達の積極的に的に学ぶ姿勢（単に講義に出て単位を取るといだけでなく）を問う場面（機会）もあってもいいのではないかと思います。

- ・どこで受講しているのか最初わからないので、担当教員に初回に挨拶に来るなどのマナーの徹底が必要かと思います。（筆者：教員からの要望がきっかけとなり、その後挨拶に行くように改善された。）
- ・別のクラスに事前情報もたらされず、最初に適切な対応ができなかった恐れがある。聴覚に限らず、障害を持つ学生についての詳しい情報は、事前に詳しく知らせてもらえるとう有難い。

#### 4. ま と め

本学の聴覚障がい学生に対する、教員側からみた情報保障の実態と課題がかなり明らかになった。授業を担当している教員は概ね本学の取り組みを高く評価しており、好意的な意見が多くみられた。教員自らが積極的に聴覚障がい学生にかかわって授業を改善しているという姿勢を示した教員も少なからずいたが、あまり多くはなかった。本調査を実施した当時は、現場での支援に精力を注ぐ必要があり、聴覚障がいや支援に対する理解・啓発の取り組みが少なかったことが影響しているのかもしれない。

聴覚障がいとは聞こえない障がいというより、周囲とのコミュニケーションがうまくできない、社会参加がむずかしい障がいであると言われている。そのため、相手の話が分からないとき、その都度確認をせずに、つい分ったふりをしてしまったり、情報がないまま独りよがりな判断を下して周囲の人とずれたこ

とをすることがあるという。また、その場の雰囲気がつかめず、指示されないとうどう動いたらよいのか分らずに周囲から浮いてしまったり、集団の中にうまく溶け込めないこともあると言われている。その結果として、なかなか社会性が身に着かないとか、精神的な負担を感じてあきらめたり失望感を抱いたりしやすいようだ。さらに、知的な障がいはないにしても、言語の習得がむずかしいという現実的な問題がある。「聞こえなければ聞こえないといえばよいではないか」、と（健）聴者は考えるが、「それが言いにくいのが聴覚障がい者なのである」とも言われている。このような聴覚障がい者の特性を教員も理解しながら支援の手を差しのべていく必要がある。

授業における支援ということでは、何よりも教員自身が聴覚障がい学生存在を意識し、彼らの心理や特性を理解し、さまざまな支援手段を活用しながら効果的な教育を行えるよう意識の底上げを図っていくことが大切である。聴覚障がい学生と円滑なコミュニケーションをとるために、口話であれば、聴覚障がい学生に口元が見える状態で、出来るだけ口を大きく開けてはっきりと話し、内容が伝わったかどうか確認しながら話し合うこと（座席を前列にするなどの配慮があってもいいが、今回このような試みをした教員がいたか否か、回答からはわからなかった）が必要である。黒板などに板書する場合は、背中を向けて話されたのでは口話は読み取れない。したがって、全部書き終わってから話すなどの配慮が必要である。さらに、教員が少しでも手話を使うことができれば、教員の聴覚障がいについて理解しようとしている気持ちが（手話ができる）学生にも伝わり、安心できるかもしれない。特に、外国語の授業、グループディスカッションを用いる授業、実習などではきめ細かな配慮が必要になる。

授業後には、ノートテイクによってどの程度情報が伝達されたか確認し、足りない部分

があれば、出来るだけ個別にフォローすることも大切である。また、質問しやすいように声をかけるとか、個別に指導時間を設けるなど、必要な配慮を行うことも大事である。支援学生はスキルを磨き、それでも伝えきれなかった部分は、聴覚障がい学生から教員に質問してもらうように伝えることも必要であろう。そして、支援学生とも、効果的な授業方法について話し合う機会があればよいと思う。

聴覚障がい学生側も、障害保障は権利であるという認識をもち、積極的に発言していくべきである。当事者として支援の方法や支援者に関する情報を把握し、改善の必要な部分があれば積極的に提案していくことである(本学はノート/パソコンテイクが中心であるが、手話通訳などをもっと導入してほしいというニーズはないのであろうか)。また、予習をして授業に臨み、わからない部分は教員に質問するなどの姿勢があってもよい。情報保障の環境を整備して、本人に自信を与え、積極的に情報を求める姿勢を育てることも重要であろう。アンケートの回答で提案された「質問用紙」を常に持ち歩くという方法については、その後聴覚障がい学生に奨励したが、これを定着させることも必要である。

いずれにしても、授業での配慮の工夫など教員同士で話し合い、共有することが大切である。それをもとにマニュアルを作成することも考えられる。また、毎年行われている聴覚障がい学生や支援学生を交えた意見交換会に教員も参加するようにお願いしてもよいであろう。

なお、本アンケートで指摘された問題や要望については、その後、教職員や学生の努力で改善または解決しているものが多い。その意味では、本アンケート調査がその後のバリアフリー委員会の進展に大きな影響を与えたことは確かである。また、回答してくださった教員から、アンケートの質問で示された事

例により情報保障についての理解を深めることができたという声もあった。現在、「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan, 以下この略称を使用)」がホームページ<sup>(2)</sup>で公開している「聴覚障害学生支援ガイド TipSheet (チップシート)」には、聴覚障がい学生の修学支援に関するあらゆる情報が網羅されている。各テーマについて、A4用紙2枚の TipSheet に簡潔で分かりやすい解説を掲載しているので、印刷して手元に置いて活用することができる。資料2に TipSheet の概要を紹介しているので、参考にいただきたい。特に、教員が最低限知っていると役に立つ TipSheet (高等教育における聴覚障害学生支援①、情報保障の手段⑥、文字による支援方法⑦、手書きのノートテイク その特徴と活用⑧、パソコンノートテイク その特徴と活用⑨、聴覚障害学生の心理的支援⑩、授業における教育的配慮⑪)を資料3に掲載した。まず最初は、高等教育における聴覚障害学生支援①、聴覚障害学生の心理的支援⑩、授業における教育的配慮⑪を読んでおくと、聴覚障がい学生の情報保障を意識した授業を準備する心構えができる。実は、ここで紹介されている内容は、聴覚障がい学生のみならず、他の学生の授業理解を促進することにもつながる、まさにFD推進の一環として考えることができるものになっていると言ってよい。

なお、本学の教職員および学生は、PEPNet-Japan が提供する啓発教材であるDVDシリーズ「Access! 聴覚障害学生支援」を情報ポータルで閲覧できるようになっている(PEPNet-Japan から許可を得ている)。左側の「授業支援」メニューから、「聴覚障がい学生支援」を選択するとアクセスできるので、是非活用していただきたい。

DVDシリーズ「Access! 聴覚障害学生支援」4巻のタイトルは次の通りである。

①「学び」を支える大学づくり

②小さな「気づき」で変わる授業・変わる大学

③「君」から広がる支援の輪

④踏み出そう！ 社会への「道」

また、2009年度に独立行政法人日本学生支援機構から「教職員のための障害学生修学支援ガイド」<sup>(3)</sup>が全国の高等教育機関に配布されている。本ガイドは、大学、短期大学及び高等専門学校におけるさまざまな障がいを持つ学生の修学支援について参考になる情報を網羅している。日本学生支援機構のホームページの「障害学生修学支援」のページ<sup>(4)</sup>にも、障害学生修学支援に関するあらゆる情報が掲載されているので、こちらも参考にしていただきたい。

## 謝 辞

本調査に対し、多くの教員から大変丁寧な回答が寄せられた。お忙しい中、回答してくださった教員の皆様に感謝申し上げます。また、調査票を作成するに当たり、白澤麻弓氏が実施した調査を参考にさせていただいた。さらに、教務課職員の井上寿枝さんにも調査票作成の検討に加わっていただいた。記してお礼

を申し上げます。

本調査の整理と分析は、2009年度の札幌学院大学「研究促進奨励金（共同研究）」（研究課題番号：SGU-G 09-191014-03）を受けて行った。

## 参考文献

- (1) 新國三千代、「札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる障がい学生支援の取り組みの成果と課題(1)——バリアフリー委員会の経緯と取り組みを中心に——」, 札幌学院大学社会情報学部紀要『社会情報』Vol.19, No.2, pp. 53-84, 2010年3月
- (2) 「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）」ホームページのURL <http://www.pepnet-j.com/>
- (3) 独立行政法人日本学生支援機構「教職員のための障害学生修学支援ガイド」（平成21年10月発行，改訂版発行予定有り）
- (4) 日本学生支援機構のホームページ内の「障害学生修学支援」のURL [http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/)

## 資料 1

**聴覚障がい学生に対する情報保障に関するアンケート調査（お願い）**

2007 年 10 月 1 日

札幌学院大学バリアフリー委員会 新國三千代

nikkuni@sgu.ac.jp

聴覚障がい学生の情報保障にご協力下さいましてありがとうございます。

本学には、現在 11 名の聴覚障がい学生が在籍しています。その内 8 名の学生が情報保障支援を希望され、受講科目にテイカー（ノートテイク・PC 要約筆記）を付けています（一部、手話通訳(学生)を併用している科目もあります）。

昨年度は前後期合わせて 158 科目にテイカーが入りました。今年度の前期は、先生が担当された科目を含め 71 科目にテイカーが付きました。

この度、前期にテイカーを配置された科目を担当された先生に、授業において配慮されたことやご苦勞されたこと等をお尋ねするアンケート調査をさせていただくことに致しました。お忙しいところお手数おかけしますが、10 月 20 日迄にご返答下さいますようお願い致します。

参考まで、聴覚障がい学生の受講科目とテイクの種別を添付致しました。

なお、本アンケートの結果は、聴覚障がい学生に対する情報保障について実態を把握し、課題等を明らかにするために利用するもので、バリアフリー委員会のみが閲覧し、責任を持って保管し、これ以外の目的には使用しません。本趣旨をご理解の上、お答え下さいますようお願い致します。

**（お願い）****10 月 20 日迄にご返答お願い致します。**

コミセンの新國のポストにご回答をお入れ下さるか、メールでも送付してございますので、**nikkuni@sgu.ac.jp** 宛ご返信下さいますようお願い申し上げます。

お名前 \_\_\_\_\_ (無記名も可)

- I. 講義／演習／実習／ゼミ等において、聴覚障がい学生の受講において、配慮または工夫されたことはありますか？ 下記で該当する数字に○をお付け下さい。(複数選択可)

【通常の講義の場合】

1. できるだけレジュメを準備する
2. 大きくはっきりと、聞き取りやすい声で話す
3. 極端に早口にならないようにする
4. 口元が隠れないように注意する
5. 専門用語や聞き慣れない単語を板書する
6. 時々障がい学生やテイカーの様子を見る
7. 時々間をあげながら話す
8. 流れがわかる程度に板書する
9. テキストを用いるときには通訳者用のテキストを準備する
10. 数式など、あらかじめ板書に書く内容が決まっているときにはそれをコピーして渡す
11. OHPやパワーポイントを用いるときには原稿のコピーを用意する
12. 資料の説明のさいは該当箇所をはっきりと示す
13. テイクに都合の良い席を優先させる
14. テイカーが説明を聞き取ることができるよう静かにしてもらう
15. 図表はレジュメに掲載しておく
16. できるだけ指示語ではなく具体的に言葉で説明する
17. テイカーなどの通訳者に事前に内容を伝える
18. 視覚教材を多く用いる
19. 他の学生とは別に参考文献を紹介する
20. 特に配慮はしていない(その理由: \_\_\_\_\_)
21. その他 具体的に( \_\_\_\_\_)

【ゼミ／演習／実習の場合】

1. 通訳者分のレジュメを用意する
2. 大きな声ではっきり話すよう学生に促す
3. 声が小さい時や早口などで聞き取りにくいときは、はっきり話すよう学生に注意する。
4. テイカーが通訳しやすいように、学生の発言内容が曖昧などときには整理して言い直す
5. 時々論点を整理する
6. 複数の発言が同時にあった場合は、一人ずつ順に話すよう促す
7. 議論のペースが速いときには調整する
8. 見学などでテイクが難しいところには手話通訳をお願いした
9. 特に配慮はしていない(その理由: \_\_\_\_\_)
10. その他 具体的に( \_\_\_\_\_)

**【ビデオ教材を用いる場合】**

1. ビデオを使うことをティカーと障がい学生に事前に連絡する
2. 教室を暗くするときには通訳の部分に照明を用意する
3. 聞き取り易い音量に調整する
4. ビデオと同時に話さない
5. タイトルと内容を簡単に説明してから放映する
6. 字幕をつける
7. 内容をまとめたレジュメを渡す
8. 特に配慮はしていない（その理由： ）
9. その他 具体的に（ ）

II. 講義／演習／実習／ゼミ等において、聴覚障がい学生の受講において、困ったことや難しいと感じたことがありましたら、下記についてお教え下さい。

III. 担当するにあたって事前に把握したいことがございましたらお教え下さい。

IV. 聴覚障がい学生に対する要望（例、理解できないところなど質問して欲しい）がございましたらお教え下さい。

V. 情報保障を支援しているノートテイカー／PC通訳／手話通訳の学生に対する要望がございましたらお教え下さい。

Ⅵ. 聴覚障がい学生が受講している科目と聴覚障がい学生が受講していない科目で違いを感じたことがありました？ 例えば、どのようなことでしょうか？

Ⅶ. 聴覚障がい学生の座席について

1) 講義の場合、どのようにされていますか？ ○を付けて下さい。

1. 本人（またはテイカー）の希望に任せている

2. 座席を指定している

位置は、 a) 前方, b) 後方, c) その他

Ⅷ. バリアフリー委員会および本学の支援体制に対しご要望等ございましたらお教え下さい。

お忙しい中、調査にご協力下さいましてありがとうございました。



## 資料 2

「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)」が公開している「聴覚障害学生支援ガイド TipSheet (チップシート)」の概要

高等教育における聴覚障害学生支援 ①

聴覚障害学生支援の必要性  
聴覚障害学生の感じる困難  
講義保障の手段  
講義保障の担い手

(2) 講義資料  
(3) ビデオやDVDの字幕  
(4) FM補聴器の貸し出し

聴覚障害学生支援の全国的状況 ②

高等教育機関における聴覚障害学生支援の現状  
(1) 聴覚障害学生の在籍状況  
(2) 聴覚障害学生に対する支援の現状  
(3) 全学的支援体制の整備状況

文字による支援方法 ⑦

文字による支援とは？  
ノートテイク  
OHPを用いた手書き要約筆記  
パソコンノートテイク  
速記による支援  
音声認識による支援  
遠隔地での支援

聴覚障害 ③

聞こえのしくみと難聴

(1) 外耳  
(2) 中耳  
(3) 伝音難聴  
(4) 感音難聴  
(5) 混合難聴と老人性難聴  
(6) 子どもの難聴とおとなの難聴

手書きのノートテイク その特徴と活用 ⑧

ノートテイクの目的  
手書きによるノートテイクの特徴  
ノートテイクの評価

聴覚障害幼児・児童・生徒を囲む教育環境 ④

障害の早期発見と教育の開始  
幼稚園段階の教育環境  
小学校段階の教育環境  
中学校段階の教育環境  
高等学校段階の教育環境  
障害とニーズの多様性

パソコンノートテイク その特徴と活用 ⑨

文字による適切な配慮  
1人要約入力と連係入力  
ノートテイクの評価

聴覚障害教育におけるコミュニケーション方法 ⑤

聴覚障害教育におけるコミュニケーション方法  
聴覚口話法  
キュード・スピーチ  
手話

高等教育における手話通訳 ⑩

手話とは  
(1) 手話とはどんなもの？  
(2) 手話を使う人は？  
手話通訳とは  
(1) 通訳とは？  
(2) 手話通訳の特徴  
(3) 高等教育における手話通訳  
手話通訳を利用した授業  
(1) 手話通訳派遣の手順  
(2) 手話通訳者への情報提供  
よりよい情報保障を行うために

情報保障の手段 ⑥

様々な情報保障の手段  
文字による支援方法  
(1) ノートテイク  
(2) パソコンノートテイク  
(3) OHP ノートテイク  
(4) 音声認識ソフトによる音声同時字幕システム  
手話通訳  
その他の様々な情報保障の手段  
(1) 板書

手話通訳による支援 ⑪

手話通訳者の確保  
(1) 派遣機関に依頼する方法  
(2) 高等教育機関で通訳者を確保する方法  
支援の実際

補聴援助システム ⑫

「補聴援助システム」とは？  
「補聴援助システム」の効果とは？

「FM 補聴システム」とは？

「FM 補聴システム」の種類

「FM 補聴システム」の使い方

その他の補聴援助システム

#### 聴覚障害学生支援におけるコーディネート業務 ⑭

コーディネートの業務

コーディネーターの設置形態

コーディネーターに求められる資質と条件

#### 入学当初のサポート ⑮

入学決定後のサポートの流れ

入学前の打ち合わせ

履修に関する配慮

入学式での情報保障

オリエンテーション

配慮の依頼

#### 学期初めのコーディネート業務 ⑯

教員による配慮や環境整備

(1) 教職員への働きかけ

(2) 授業担当教員との打ち合わせ

情報保障支援の準備

(1) 募集～養成

(2) 登録

(3) 支援者の配置（シフト作成）

授業開始後のコーディネート

(1) 授業における情報保障支援の運営

(2) 聴覚障害学生のニーズ把握

(3) 次学期に向けて

支援担当者の留意事項

#### 障害学生支援の財源について ⑰

公的な財源

支援体制の立ち上げに必要なこと

個人予算を充当することの是非

競争的研究資金の活用

#### 聴覚障害学生の心理的支援 ⑱

さまざまな聴覚障害学生

支援がもたらす心理的葛藤

心理的葛藤から主体性形成へ

(1) 消極的反応段階

(2) 受動的利用段階

(3) 主体的活用段階

各段階に応じた支援

(1) 消極的反応段階での支援

(2) 受動的利用段階での支援

(3) 主体的活用段階での支援

全段階を通じての支援

#### 授業における教育的配慮 ⑲

聴覚障害学生への情報保障の意義

全般的な留意事項

授業における留意事項

(1) 講義形式の授業

(2) ゼミ形式の授業

(3) 体育などの教室外の授業

(4) 実験や実習

#### 音声認識技術を用いた情報保障 ⑳

音声認識とは？

音声認識技術を使った情報保障の手段

音声認識技術を用いた情報保障システム

現状と問題点

(1) 復唱担当者求められるスキル

(2) 誤認識と字幕の読みやすさ

情報保障における音声認識技術の今後

#### 支援体制の組織化のプロセス㉑

全学的な支援を行う意義と必要性

支援体制の組織

予算

支援体制立ち上げの流れ

(1) 聴覚障害学生の入学前

(2) 聴覚障害学生の入学の決定前後

(3) 主体的活用段階



## 資料 3

## PEPNet-Japan TipSheet

# 高等教育における 聴覚障害学生支援

①

## 聴覚障害学生支援の必要性

聴覚に障害のある学生が大学などの高等教育機関で学ぶ際、通常の音声によって伝えられる授業の情報を受け取ることができないなどの困難が生じます。そのため、多くの聴覚障害学生が、大学や短期大学での授業を振り返って、以下のような感想を残しています。

「先生方が一方的に話をする大学の授業では、わからないのが当たり前でした。特に教科書を用いない授業では、何の勉強をしているのかさえもわからず、ただ先生の様子を眺めているしかありませんでした。中でも、授業の中で、教室がドッと笑いに包み込まれる時間が一番苦痛でした。みんなが楽しそうに笑っているのに、自分だけ何のことかわからずに下を向いている。この時の独りとり残されたような寂しさ。自分も聞こえる学生と同じように授業を聞きたい、何度もそう思っていました。」

このことは、多くの聴覚障害学生にとって、高等教育機関で行われる授業が支援なしにはわからないものであり、板書の文字やスライドなど数少ない手がかりを必死に追い求めている状態にあることを示しています。これが、小学校低学年レベルの授業であればどうでしょう？ 先生は重要なポイントをひとつひとつ丁寧に板書をし、児童の様子にあわせて、ゆっくりと話を進めることでしょう。このような授業であれば、聴覚障害児も何とか周りの状況についていくことができるかもしれません。しかし、そうした低学年の授業でさえ、周りの児童の発言や先生の説明の詳細は聞きとることができず、たとえ要点はわかっても必ずしもその場に参加できているとは言えないのです。ましてや高度な専門知識が伝達される高等教育機関の場合、聴覚障害学生が学習遂行上最低限必要な情報さえ得られない状況にあるのは想像に難くありません。

このような聴覚障害学生の状況に対して、ノートテイクや手話通訳などの手段を用い、授業を聞く権利、授業に参加する権利を保障する取り組みのことを「情報保障（講義保障）」と言います。本シートでは、情報保障をはじめ、聴覚障害学生が大学生活を送る上で必要な支援の内容とその考え方について説明します。

## 聴覚障害学生の感じる困難

まず、聴覚に障害のある学生が大学生活上感じやすい困難には、先述の授業における問題以外に以下のような内容が挙げられます。

### ●友達との会話に入れない

新しい友人と出会い、人間関係を広げることも大学生活

上非常に重要な要素となりますが、友人同士の些細な会話に入れず、仲間作りが難しいことがあります。

### ●討議についていけない

学年が上がるにつれ、学生相互の意見交換が重要になりますが、こうした討議への参加が困難になります。

### ●連絡や放送がわからない

口頭による試験や休講の連絡、校内放送の内容がわからず、予定の変更などに気づかないことがあります。

### ●連絡が取れない

メールの普及によってかなり状況は改善されてきましたが、電話による音声会話が困難なため、間接的コミュニケーションによる連絡には不便さが残ります。

### ●非常時の情報が得られない

非常ベルの音や避難に関する情報が伝わらず、逃げ遅れたり危険にさらされたりすることがあります。

この中でも、はじめに述べた授業への参加の困難性は、大学生生活上最も大きな問題であり、聴覚障害学生支援の中でも中心の課題になっています。以下では、こうした授業場面における支援の方法について説明をしていきます。

## 情報保障の手段

「音声による情報理解が困難なため、授業で話されている内容がわからない。」このように聞くと、多くの方が、ではスライドや資料などの視覚教材を増やせばよいだろうと思われるでしょう。また、これを補完するために「友人にノートを借りたり、授業中資料にない内容をメモしてもらうなどの方法をとればよいのではないか」と考えつかれるかもしれません。実際、授業担当の先生や同じ授業の参加者によるこのような支援は、聴覚障害学生にとって非常に役立つサポートのひとつです。ただ、残念ながらこのような方法だけでは、抜け落ちてしまう情報がたくさんあるのも事実なのです。

たとえば、先生のお話の中には、資料の中には載っていないようなわかりやすい例や、日常的な経験と結びつけた解説、雑談、たとえば話などさまざまな要素が含まれているものと思います。その中には、先生方の人間性や研究に対する姿勢に触れるようなお話があったりもするかもしれません。このようなお話を聞いて、専門分野の内容に興味をもち、これをきっかけに自分自身で勉強を進めるといったのが、授業のあり方のひとつなのではないかと思います。しかし、聴覚障害学生にとって視覚教材や友人による手助けだけでは、こうしたある意味重要な要素が伝わらないまま過ぎてしまうことも多いのです。聴覚障害学生の多くが、「内容を理解するだけなら、後でノートを借りればよい。

けれどもそれだけでは自分が何のために大学に入学し、授業に出席しているのかわからない。」という意見を述べています。そこで、聴覚障害学生がこうした授業における皆さんの情報を他の学生と共有するためにも、先生方のお話やその他の音情報をリアルタイムに文字や手話に変える「情報保障者（講義保障者）」あるいは「通訳者」の存在が不可欠なのです。

このうち、手話を用いて行う方法を「手話通訳」といい、筆記による方法のうち、先生のお話を手書きでルーズリーフなどに記載していく手段を「ノートテイク」、同様の作業をパソコンで行う手段を「パソコンノートテイク」といいます。現在、高等教育機関における授業保障には、これら三つの手段が多く取り入れられています。

### 情報保障の担い手

では、このような授業保障は誰が担当するのがよいのでしょうか？ 大学にとって最も手軽な方法は、同じ授業に出席している友人にこうした保障を担ってもらおうという方法でしょう。けれども、先生のお話をもらさず伝えるという作業を担当していると、本来その学生が聞きたいと思っている部分に集中することができません。そのため、聴覚障害学生に対して情報を提供できたとしても、今度は保障を担当する学生の授業に参加する権利を奪ってしまう結果になります。ですから、聴覚障害学生に対する情報保障は、授業の参加者ではない第三者が担当のが一般的です。

それも、聴覚障害学生が自分でそうした人を見つけるのではなく、大学として人材を確保し、授業に配置していく必要があるでしょう。なぜなら毎日行われる授業において、誰にどの保障の手段を依頼するか考え、調整することは、聴覚障害学生にとって非常に大きな負担となります。人材の調整には時間がかり精神的な苦勞も伴いますし、先生に配置の許可を事前に得ておくなど大変な作業です。授業に出るたびにその負担を負わせるのは平等ではないと考えられます。

では、学部や事務が中心となってボランティアの学生を募り、講義に配置するという方法ではどうでしょうか？あるいは、手話サークル等のボランティアサークルが中心となってこのような活動をするという方法も考えられるでしょう。中には、こうした学生同士の支え合いこそが重要であるという考え方もあるかもしれません。

確かに聴覚障害学生をとりまく学生達が、聞こえないという障害について理解し、必要なサポートを行っていくことは非常に重要です。しかし、手話通訳やノートテイク、パソコンノートテイクといった情報保障には、高度な技術と専門知識が必要で、そのような技術を持たない学生では

十分保障ができない場合も多くあるのが事実です。

また、このような学生同士の支え合いによる支援は、保障を受ける聴覚障害学生、保障を担当する学生の両者にとって、負担がわかりやすいという問題があります。聴覚障害学生にとっては、「もっと書いてほしい」などの要望があっても「助けてもらっている」という思いから、自分の気持ちを伝えることができなくなりますし、情報保障を担う学生にとっても、十分に伝えられないことに対する不安から、保障を担うことが重荷になったりするためです。そこで、聴覚障害学生とまわりの学生との人間関係への配慮からも、専門性のある第三者を情報保障者として正式に授業に配置していくことが重要です。同時に、単に無償のボランティアではなく、技術に合った報酬を支払うのも重要な大学としての責務のひとつです。

とはいえ、高等教育機関での情報保障には、非常に高度な専門性がともなうため、全国を見渡してもこれを担うことのできる人材が圧倒的に不足しているのも事実です。そのため、外部に人的資源を求めても、十分に必要の情報保障者を確保しきれないという問題も立ちはだかっています。また、予算の面からも専門的な情報保障者をすべての授業に配置することが可能な大学はまだまだ少ないかもしれません。そのため、最近ではこうした問題の解決策として、大学が主体となって情報保障の養成講座を開講し、ある程度の知識と技術を身につけた学生を授業に配置し、授業終了後一定の報酬を支給する形で情報保障を行う例も増えてきています。このような取り組みは、ある程度の技術を持った情報保障者を一定数確保できるという面で現時点でのひとつの解決策になると思います。ただし、この方法が聴覚障害学生が遺憾なくその力を発揮するための最善の方法かという点、そうとは言えないでしょう。

聴覚障害学生支援先進国のアメリカでは、在籍する聴覚障害学生への支援のために手話通訳者を職員として雇用するのが一般的です。また、近年我が国でもこうした方法で専門性の高い保障を提供する大学も出てきています。すべての学生に対してきちんと伝わる授業を実施すること、これは、本来大学教員あるいは大学全体にとっての責務であるはずで、そう考えると、情報保障者の存在は、聴覚障害学生のためではなく、大学側がこの責務をまっとうするためのひとつの手段であると考えられます。ぜひ、大学の財産のひとつとして聴覚障害学生支援をとらえ、すべての学生が等しく学習できる環境作りを進めていっていただければ幸いです。

執筆者 白澤 麻弓（しらさわ まゆみ）

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授

（2008年10月26日 第3版）

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当：白澤麻弓 E-mail [pep-info@pepnet-j.org](mailto:pep-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japan は筑波技術大学の運営による高等教育機関ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成による TipSheet を参考に、PEPNet-Japan が独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。



## PEPNet-Japan TipSheet

## 情報保障の手段

⑥

## 様々な情報保障の手段

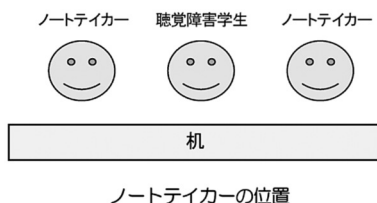
聴覚障害学生に対する情報保障の手段は、個々の学生の教育歴やコミュニケーション方法・言語、聴力レベルなどの要因によって、ニーズが異なります。文字情報や手話通訳をつければ情報保障の問題がすべて解決するわけではなく、各機関の情報保障支援のコーディネーター担当者が聴覚障害学生からニーズを把握し、それぞれの授業における支援方法を検討していく必要があります。

現在、日本の高等教育機関において行われている聴覚障害学生の情報保障において、その代表的なものには、ノートテイク、パソコンノートテイク、OHPノートテイク、音声認識ソフトの活用などの「文字による支援方法」、「手話による支援方法」が挙げられます。文字や手話による情報保障以外にも、教員の授業の進め方によって、「その他の様々な情報保障の手段」を活用していく方法があります。

## 文字による支援方法

## (1) ノートテイク

ノートテイクは、聴者のノートテイクが教員の話を読んだり、ルーズリーフなどの紙に書き取っていく方法です。「ノートテイク」とは、ノートテイクの担当者のことです。例えば、1コマ90分の授業とすると、ノートテイク1名だけで全ての時間を担当することは、手指や腕などの筋疲労や精神的な負担が大きく、非常に困難であるため、一般にはノートテイク2名を配置し10～15分ごとに交代しながら、ノートテイクを進めます。2名のノートテイクたちは、下図のように聴覚障害学生の両側の座席に位置し、情報保障を行っていきます。



ノートテイクには、教員が話している内容を、雑談なども含めて、できるだけたくさん書き上げていく「通訳としてのノートテイク」と、手話通訳を活用するときには授業内容をコンパクトにまとめていく「記録としての

ノートテイク」の2種類があります。通訳としてのテイクの場合、ノートテイクは交代しながら進めていきますが、一人はテイクを、もう一人は教科書や資料の指示をすると良いでしょう。ノートテイクは、教員の話をつまみとめながら、できるだけたくさん情報を書き取っていくことが望まれます。熟練したノートテイクの場合、1分間に60～70字程度の文字の書き取りが可能となっていきます。

ノートテイクは学外派遣者や学内の学生などが担当しますが、学生がノートテイクを担当する場合、授業を履修しない学生が担当することが前提であることを理解してほしいと思います。この場合、情報保障者と学習者の2つの役割を担った結果、授業内容が理解できなくなり、単位を落としてしまうことになりかねません。この点は、十分に留意してほしいものです。

## (2) パソコンノートテイク

パソコンノートテイクは、ノートテイクの代わりに、ノートパソコンのワープロソフトを使って、教員の話を入力していく方法です。手書きのノートテイクと違って、パソコンノートテイクの場合、プロジェクターなどの字幕出力機器とスクリーンを活用すれば、一度に多数の聴覚障害学生に情報保障を行うことができます。1名でパソコンの文字入力の作業を進めることは疲労度が高くなってしまったため、2名1組で情報保障を行っていくことが望ましいです。

ワードやテキスト文書などに、ノートテイクが文字を入力していく方法もありますが、最近は、IPtalk（アイピートーク）等のフリーソフトを利用して情報保障を進めるケースが増えていきます。この場合、ノートテイク2名はそれぞれ1台のノートパソコンを用意してケーブルの接続をします。IPtalkを活用すると、入力者はお互いの入力の様子を見ながら、聞き取った内容を連携して入力していくことができます。

パソコンノートテイクの場合、ノートテイクの入力速度にもよりますが、少し練習すれば1分間に100字以上の入力が可能です。熟練したノートテイクは1分間に200字以上の入力が可能となります。2名で連携して入力すると、さらに多くの情報を入力できることとなります。

## (3) OHPノートテイク

OHP（オーバー・ヘッド・プロジェクター）を利用したノートテイクで、一般的には、2名以上のノ

トテイクによって文字情報を書き取っていき、大型のスクリーンにその文章を拡大投影していきます。OHPノートテイクは、同じ授業を複数の聴覚障害学生が履修する場合、一度に情報保障を行うことができます。最近では、OHC（オーバー・ヘッド・カメラ）を使用し、テイクした文章だけでなく、資料や図表、写真なども、すべてスクリーンに拡大して映し出す機器も活用されるようになってきました。

#### （４）音声認識ソフトによる音声同時字幕システム

音声同時字幕システムは、話者の音声をパソコンの音声認識ソフトを活用して文字化し、パソコンの画面やスクリーンなどに文字を表示するシステムです。現在では、国際会議などでの字幕、放送局の字幕システムなど、様々な場面で利用されています。現在の音声認識技術では、あらかじめソフトウェアに声の特徴などを登録しておくことによって認識率を高める方法がとられています。

このシステムでは、音声認識ソフトの特性を活かして、話者の声を直接認識させるのではなく、特定の訓練された人（同時復唱者）が復唱して認識させることで字幕精度を上げ、実用化しています。また、同時修正者が誤変換を修正する作業を入れることでさらに精度の高い字幕を提供することができます。

同時復唱のみを行う場合は、最初に、同時復唱者が復唱し、コンピュータが音声認識して文字化します。その後で、文字を利用者のパソコンやスクリーンなどに表示します。

同時復唱と同時修正を行う場合は、最初に、同時復唱者が復唱し、コンピュータが音声認識して文字化します。次に、同時修正者がソフトウェアを使って誤認識のあった箇所を正しい内容に修正します。最後に、修正された文字を利用者のパソコンやスクリーンなどに表示します。

### 手話通訳

手話通訳による情報保障とは、授業担当の教員の話や学生の意見・質問、視聴覚機器の音声などの情報を手話に変換して通訳することや、聴覚障害学生の手話を音声に変換して通訳することです。しかし、手話通訳による情報保障のほとんどは、授業で話される教員の手話を手話によって通訳するケースです。この場合、手話通訳者の手話スキルが高ければ、聴覚障害学生は、ノートテイクやパソコンノートテイクよりも、多くの情報を確実に得ることができます。専門性が高い手話通訳者は、学内にも、各地域にも非常に少ないため、人材の確保とその養成が課題となっています。

一般的に、ノートテイクなどと同様、手話通訳者は15～20分ごとに交代しながら通訳を進めます。この手話通訳者は、聴覚障害学生の前に位置し情報保障を行っています。手話通訳を行う位置は、話し手と手話通訳が同時に視野に入り、通訳者にとってその声が聞こえやすい場所を選びます。

### その他の様々な情報保障の手段

#### （１）板書

聴覚障害学生が理解しやすいように、講義担当の教員に、板書を多くする支援をしてもらうようにします。特に、講義において初めて登場する専門用語などは、必ず板書してもらうようにお願いします。

#### （２）講義資料

たくさんの情報を板書しながら講義を進めることは、教員にとって手間がかかり、時間も多くとります。そのため、事前に、用語を説明した資料や、講義の流れを書いた資料を配布することで、聴覚障害学生に限らず、一般学生にも理解しやすい講義が進行できることを、講義担当の教員に理解してもらうとよいでしょう。

#### （３）ビデオやDVDの字幕

ビデオやDVDは字幕が付いたものを、できるだけ、積極的に活用してもらうようにします。教員がビデオなどを視聴させながら、説明を加えることは避けてもらいます。ノートテイクや手話通訳による情報保障においては、映像の音声と教員の音声を同時に通訳することはできません。字幕の付いたビデオやDVDがなければ、機器を使って字幕を付けたり、音声情報を書きおこして資料を作成する情報保障の方法もあります。

#### （４）FM補聴器の貸し出し

FM補聴器は、イヤホンとワイヤレス・マイクがセットになっており、マイクに入った音はFM電波でイヤホンへと飛んでいきます。一般の補聴器では、話している人から遠ざかるほど、その人の声は聞こえにくくなりますが、FM補聴器の場合、講義担当の教員に、マイクをつけてもらえば、多少離れた座席でも、声をはっきりと聞くことができます。周りの雑音まで大きく聞こえて煩わしいという悩みからも解放されます。FM補聴器を聴覚活用が可能な聴覚障害学生に貸し出すことで、情報保障を行っている高等教育機関もあります。

執筆者 岩田 吉生（いわた よしなり）

愛知教育大学障害児教育講座准教授

（2008年10月26日 第3版）

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当：白澤麻弓 E-mail [pepj-info@pepnet-j.org](mailto:pepj-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japanは筑波技術大学の運営による高等教育機関ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成によるTipSheetを参考に、PEPNet-Japanが独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。



## PEPNet-Japan TipSheet

⑦

## 文字による支援方法

## 文字による支援とは？

聴覚障害学生が望む情報保障手段は、その聴力の程度や教育環境、授業の形式などによってさまざまです。本 TipSheet では、高等教育機関で用いることのできる各種情報保障手段のうち、「文字による支援」について概略に触れます。

「文字による支援」とは、教員などが発した音声を何らかの方法で文字に変換し、聴覚障害学生に提示することによって、聴覚障害学生を授業に実質的に参加させるための支援（授業保障）のことです。

どの手法を利用するにしても、情報保障に対する教員や関係者の理解が必要となります。また、毎回の授業で情報保障を提供するためには、人員の確保はもちろん、誰がどの授業を担当するかを割り振るコーディネート業務などにも必要となります。

講師の発話速度はまちまちですが、例えば、発話すること一つのスキルとして持つアナウンサーの話す速度は通常 1 分間あたり 350 文字から 400 文字と言われています。手書きや一般的なパソコンを利用する方法では、この発話速度に追従することは困難です。そのため、話者の発話速度によっては発話者の話の中から重要性の高い内容を抽出して伝える（要約する）ことが重要な技術の 1 つとなります。

どの手法も、聴覚障害学生にわかりやすく、そしてスムーズに実施するためのノウハウが蓄積されています。以下では、各手法に関して個別に概略を説明します。

## ノートテイク

ノートテイクには、記録をとるという意味でのノートテイクとリアルタイムの情報保障としてのノートテイクがありますが、通常は後者を指します。情報保障としてのノートテイクでは、ノートテイクの担当者（ノートテイクカー）が聴覚障害学生の隣に座り、2～3名でルーズリーフ等に要約文を手書きします。聴覚障害学生はノートテイクカーが書いたノートを横から見ることで情報を得ます。聴覚障害学生が複数の場合は、OHP を利用してノートテイクしたものをプロジェクターやモニタに投影することも可能です。

手書きの速度は 1 分間で 70 文字程度なので、提供可能な文字数内に納まるように、効率よく内容を伝えることが重要となります。複数人で担当する場合には、筆記を担当しない人がサポート役になり、資料の提示などのサポートを行い、役割を 10～15 分程度で交代しながら連携作業を行います。記入する内容は、教員や学生の発言内容だけではなく、その場の音環境も可能な限り伝えます。現在、高等教育機関において最も多く用いられているサポート手法で、学内で募った学生ボランティアに対して、養成講座を開講するなどして技術を伝え育成する場合があります。

## OHPを用いた手書き要約筆記

OHP による方法では、ロールフィルムという透明で長いフィルムに、油性ペンで文字を記入していきます。その文字が、OHP によってスクリーンに投影されるため、複数人で見る事が可能です。通常 3～4 名で担当し、メインの筆記者と補助の筆記者、そしてロールフィルムをタイミングよく引く、引き手で連携して実施します。

担当者は OHP の強い光から目を守るために偏光グラスをかけ、フィルムに貼り付かないように手袋を着用します。手書きによる入力速度は 1 分間あたり 70 文字程度と少ないため、より効率よく情報を伝えるために、よく使う言葉や長い固有名詞をあらかじめちいさなフィルムに記入しておいたり、文の前半をメインの筆記者が、後半を補助の筆記者が記入するなど様々な工夫が用いられます。

パソコンノートテイクの普及により、OHP による方法の利用は減少してきましたが、記号や数式など手書きでないと対応が困難な場面では、引き続き有効に活用できるでしょう。

## パソコンノートテイク

この手法では、文字提示のためにパソコンを利用します。最も簡単な手法として、ワープロソフト等を用いて文字を入力し、その画面を聴覚障害学生に提示する方法でも支援は可能です。一般的には専用ソフト（IPtalk、まあちゃん等）と LAN を用い、入力者のパソコンで入力された文字を表示用のパソコンにネットワークを介して送信し、その画面を聴覚障害学生に提示します。

また、聴覚障害学生が複数参加している場合や場所を特定できない場合には、プロジェクターで表示用パソコンの文字情報を大きく投影して、見てもらうような方法もとることができます。複数人で担当する場合には、担当者の数に応じた台数プラス 1 台（表示用）のパソコンが必要です。また、各パソコン間の通信には、ハブや LAN ケーブルといったネットワーク用の機器（市販製品）も利用します。

手元を視認しないで入力する「タッチタイピング」を習得すれば、1 分間あたり 120～180 文字程度（熟練者であれば 200～250 文字程度）の入力が可能となります。さらに、1 文を複数人で入力する連携入力を用いれば、原文の 8 割程度を伝えることも可能になります。

習得にはある程度の訓練を必要としますが、熟達すればかなりの情報量が伝達可能なため、ノートテイクに並んで積極的に活用したい方法のひとつです。

## 速記による支援

速記技術を応用した文字提示方法で、特殊な入力装置（ステノキーボード、ステンチュラなど）を利用し、発話内容をほぼすべて文字に変換していきます。もともとは裁判所にお



ける速記を目的に開発された技術ですが、現在いくつかの企業や団体がこの方法を用いて聴覚障害者への支援を行っています。その中には、数はごく限られていますが、放送番組の字幕をリアルタイムに入力する業務を請け負っている企業や、高等教育機関における情報保障を目指して活動している団体などがあります。

入力は、メインの入力担当(1～数名)と校正担当(1名)がチームを組み、複数チームで交代しながら文字を入力するものから、1名で担当する例まで形態はさまざまです。入力手法が特殊であるため習得に多くの時間が必要であり、人員の確保が今後の課題となっています。

### 音声認識による支援

通常のパソコンで動作する市販の音声認識ソフトウェアを利用して、情報保障を行おうとする試みもいくつか報告されています。現在、市販されている音声認識ソフトウェアの中には、ソフトウェアに適した発話を行えば、かなりの認識精度が得られるものがあります。しかし現在のところ、教員が発話した音声そのままで十分な認識精度が得られず情報保障としては不十分であるため、教員の音声を担当者が“復唱”し、その音声を音声認識ソフトウェアで文字化する方法を採用しているグループが大半です。また、得られた文に含まれている誤認識文字を校正する作業も非常に重要になっています。そのため、通常はこの2段階のステップを経て、聴覚障害学生に文字が提示されます。

容易に多くの情報を聴覚障害学生に提供できるようなイメージがありますが、現在のところ人を介した入力ではありえないような誤変換が発生することも多いため、認識精度を上げるための人員配置や人材育成など、まだ多くの課題を抱えています。しかし、音声認識の技術は日々進歩を続けているため、認識率や話し言葉への対応状況が改善されてゆけば、今後有効活用の道が開けていくことでしょう。

### 遠隔地での支援

教員の発話内容をできる限り多く文字化し伝える技能には、速記による手法に限らず特殊な能力が要求されます。まして、高等教育のような専門的な場で情報保障を行うためには、高い専門技術の習得能力が必要で、そのような技能を有する人材は国内ではまだ少数と言えます。そこで、この貴重な人材による支援を国内の各所で利用するため、各種公衆回線(ISDN回線、インターネット)を使用して遠隔地からサービスを提供するという取り組みがなされています。通信手段を構築するまでにはある程度の技術的なハードルが存在しますが、(映像、音声、文字情報の送受信体制)、一度構築してしまえば繰り返しの接続は比較的容易になります。現在は、遠隔でのパソコンノートブックによる支援や音声認識を用いたサービスの提供などが実施されており、日常的にこのような手法を用いている機関も出てきています。複数キャンパスを結んだり、学内の別の教室から支援を行うなど、学内の限られた人材の有効活用にもつながるため、今後さらに発展が期待される分野であると言えるでしょう。

### おわりに

本 TipSheet で紹介した支援方法の特徴を下表に整理しました。どのような手段を利用するとしても、その手法に対する教員の理解と配慮は不可欠です。いかに有益な手段であろうと、教員が自身の授業の場でその利用を認め、特性を知った上で、有効に活用されないとい十分な効果を発揮することができません。大学の授業は聴覚障害学生を含めた学生全員に対して等しく提供されるべきものであり、それを行う責任は授業を担当する教員にあります。そのため、このような手段は聴覚障害学生のためだけに実施されるものではなく、自身の授業成立のためのサポート(教員に対するサポート)でもあるということをご理解頂ければと思います。

	必要な機材	情報量と特徴	求められる能力	養成上の課題
手書きによるノートテイク	読みやすい字を考慮した筆記具、ノートやレーズリフ	原文の2割程度(70文字/分程度)、簡潔な書き、体言止め、略語等を活用する	読みやすい筆記、要点と構造を理解し、構文を作成する力	授業を理解する専門性が必要、導入は容易だが、スキルアップに課題あり
パソコンノートテイク	一般的なパソコン、ウェブプロット等	1名での要約入力では原文の4～5割、複数名による速記入力では8割程度	パソコンを筆記用具として活用する力、整文する力、速記した文章作成	パソコン操作の習熟が必要なので、人材が限られる
OHPを用いた手書き要約筆記	OHP、投影用スクリーン、ロールフィルムやペン等	3名以上のチームで担当、筆記者が1名の場合、原文の2割程度、補助の筆記者との連携で3～5割程度	機材の特性に即した使い方や連携作業、要約して文章を構成する力、連携した文章作成能力	地域幅広分野で養成を受けた人材の活用も可能だが、高等教育に求められる知識と技術の追加習得が必要
音声認識	音声認識ソフトウェア、マイク、一般のパソコン、通信機能等	要約からほぼ全文まで多様、復唱者、修正者ともに1～複数名が交代で担当	音声認識に適した話し方、教員の音声を聞きながら発話する能力、独特の誤変換を修正する能力	実践的な段階であるために、主に独自に必要な知識やその養成手法等も確立ではない
速記(特殊な入力装置を利用)	特別な機材(キーボード、連携作業用の機材等)	ほぼ全文、1名ずつ交代で実施する他、入力担当と校正担当を組み合わせた同時2～6名で実施する場合もあり	特殊な入力装置に適した入力技能、連携した文章作成能力、いずれも数年に及ぶ特別な訓練が必要	高度な入力が可能になるためには長年に渡る訓練が必要で、それに適したコストがかかる

聴覚障害者に対する文字による支援は、現在のところまだ十分な状況にあるとは言えません。ここで紹介した手法にも、実際に授業における情報保障として利用されていないものや、すぐには実施できないものが含まれていますが、その詳細については各 TipSheet に委ねます。

執筆者 三好 茂樹(みよし しげき)

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授

(2008年10月26日 第5版)

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当:白澤麻弓 E-mail [pepj-info@pepnet-j.org](mailto:pepj-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japanは筑波技術大学の運営による高等教育機関間ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成による TipSheet を参考に、PEPNet-Japan が独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。



## PEPNet-Japan TipSheet

# 手書きのノートテイク ⑧

## その特徴と活用

### ノートテイクの目的

ノートテイク(notetaking)は、教育現場において、障害のある学生に教員の声などの音声情報を伝える「適切な配慮(reasonable accommodation)」の1つです。大きく分けるとノートテイクには、手書き、そしてパソコンの活用という2つの方法があります。

そのほかにも音声認識ソフトウェアを活用したシステムが試みられています。

ノートテイクの目的は、情報コミュニケーション支援を通じて、障害のあるなしにかかわらず、すべての学生に学習環境を保障することにあります。教室内に情報弱者を作らないための情報/バリアフリー支援策の1つともいえます。

ノートテイクは自らノートをとることが難しい上肢障害の学生や、板書が見づらい弱視の学生などにも有効ですが、聴覚障害学生にとっては、教員が発する音声情報の伝達にとどまらず、授業の場に参加しているという意識を共有するために欠かせない方法です。たとえば、教員の発言にすべての学生が静まりかえる、質疑応答を通じて理解を深めていく、教員やクラスメートの冗談によってクラスが笑いに包まれるなど、その場のいきいきとした雰囲気の中で学生は学びます。単に座っているだけでは授業に参加したとはいえません。

そこで、ノートテイカーはクラスの状況を文字情報によって補完的に伝えるという役割を担います。授業で教える内容のみを筆記あるいは入力すればよいというわけではありません。要点を記した記録を渡すのであれば、友人のノートをコピーすれば十分でしょう。音声で文字によって伝える場合、どうしてもタイムラグが生じるだけに、その場に参加しているという確かな気持ちにつながるような、言い換えれば参加意識を共有できるような工夫が欠かせません。同じような社会福祉サービスに要約筆記がありますが、高等教育機関におけるノートテイク活動は、きわめて専門性が高い、学生にとっては授業の記録ともなる、ノートテイカーが教育機関の設計ルールにしたがって活動するという点を特徴とします。なお、教育機関によっては「ノート持込可」の試験に際して、ノートテイカーの筆記したノートの持込を認めないところもあります。これは学生自らがノートを取ることも授業内容を理解するための重要な方法と位置づけているからで、聴覚障害学生はノートテイカーの記録をもとに再構成した自分のノートを活用することになります。

このようにノートテイクの目的や対象、方法などを明確に意識した上で、障害のある学生の支援活動の一環として、

教育機関自らがその導入に取り組む必要があります。書き方や実技指導を内容とする養成講座の実施はもちろん、ノートテイクの運営に至るまで教育機関が責任を負います。講座の受講者は地域住民、在学生などですが、とりわけ前者の場合は教科書や参考文献のコピーやレジュメを事前に渡すなど、専門的な知識を確実に伝えるための事前準備が学校側に欠かせません。また在学生がノートテイク活動を担う場合はその授業をすでに履修済みの(可能であれば優秀な成績をおさめた)学生がテイカーとして活動することが望ましいでしょう。以下チェック項目をあげておきます。

- 障害学生とノートテイクの必要性について話しあったか。
- 組織として支援活動に取り組んでいるか。
- 全教職員に支援体制の説明をしたか。
- ルールに基づいて活動を実施しているか。
- ノートテイカーのローテーションを含む調整役の存在。
- 利用者が見やすい席の確保、電源等を確認したか。
- 全学生に支援の理念と方法について周知したか。
- 地域のボランティアサークル等の協力を求めたか。
- 定期的にノートテイカーとの協議を実施しているか。
- 定期的に利用学生との面談を実施しているか。
- ノートテイクされた内容を評価する仕組みの存在。
- ノートテイカーを対象とする研修会等の存在。
- ノートテイカー養成講習会の定期的な実施。

### 手書きによるノートテイクの特徴

手書きによるノートテイクは、ノートテイカーがルーズリーフ用のノートなどに、水性ペンやボールペンで文字を素早く筆記します。教員の発言を聞きながら、その要点を素早く、読みやすく書くことがポイントです。話しことばを一言一句、正しく書くこととはいいけません。

通常、ノートテイカーは2人1組となって、聴覚に障害のある学生の両隣に座り、ノート数枚ごとに、あるいは10分程度で交代しながら筆記します。学生は、筆先を目で追いますので、見やすい位置にノートを置きます。発話速度と筆記速度の差を埋めるためには次のような工夫が欠かせません。(次回参照)

#### (1) 略号、略記の活用

たとえば「行動主義的な学習理論」など、専門用語が頻りに登場することが分かっているならば、あらかじめノートの上段に略号を明記します。「生活保護」を「生保」と略記する場合も同様です。筆記中に、しばしば登場する用語について急遽、略記や略号を決める場合もあります。

### (2) 記号の活用

略語、略号の活用のほか、繰り返し登場する言葉などは矢印を活用して効率的に示します。

### (3) カタカナの活用

画数の多い漢字や漢字が分からない固有名詞などはカタカナで筆記します。ただし、漢字で書く余裕がない場合に限ります。

### (4) 簡条書きの活用

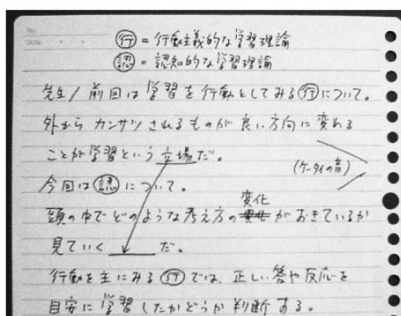
手書きによるノートテイクの表記上の基本は、「素早く、ひと目で情報が入手可能な表記」にあります。この点は文字量が多く、どちらかといえば話しことばに沿って入力するパソコン、とりわけ連係入力には見られない特徴です。

### (5) 訂正は明瞭に

訂正するときは、はっきりと二重線で訂正し、正しい言葉を上の方に書きます。

### (6) 句点を忘れず

とかく忘れがちな句点は、文章が完結したことを示すために欠かせません。意識的に句点を書く癖をつけましょう。



太田「ノートテイク(要約筆記)支援ソフトの設計と活用」『静岡福祉大学紀要第2号』(静岡福祉大学、2006年) 参照。

### (7) 話の要点を中心にまとめる

要約作業は大きく2つに分類することができます。話をまんべんなく抽出した大意と、話のポイントや狙いを的確に抽出した要旨です。手書きのノートテイクでは、まんべんなく書き続けることは難しいため、大意を基本としながらも、要旨を意識し提供する力が求められます。したがって、教員のことばの使い方に敏感になりましょう。たとえば、「要は」「つまりは」「結局」などに続く結論部分を確実に文字化しましょう。「しかし」「したがって」「一方」など、論理的な構造を明示する接続詞にも注意を払いましょう。

さて手書きの場合、伝達できる情報量が話しことばの10分の1程度と情報量が限られますので、その授業の内容に対する理解と的確に要約する力が欠かせません。しかし、能力の高いノートテイクが筆記したノートは、非常に整理され、重要部分がきっちりと書かれていますので、聴覚に障害のある学生への支援方法としては大変有効です。

2人以上の利用者に情報を提供するとき、ノートビデオやウェブカメラで撮影し、モニター画面に表示する方法や、ビジュアルプレゼンター(書画カメラ、OHCとも呼ぶ)を活用する方法もあります。

## ノートテイクの評価

ノートテイクを用意するだけでは、聴覚障害学生の学習を保障したことにはなりません。実際に書かれた、あるいは入力された内容を評価する仕組みが重要です。ノートテイクのノートを評価し、現任研修等を通じてその技術を高めていくことによって、ノートテイクの課題も明らかになります。そのノートに書かれた内容に基づいて、その学生は受験し、単位を取得するのです。ノートテイクの誤記や情報のもれが新たな差別をもたらすことのないよう、教員の協力も欠かせません。教員側の直接的な配慮とノートテイクによる間接的な配慮が相まって、はじめて適切な配慮は実現します。

直接的な配慮のなかには、ビデオなどの補助教材を使用する場合に字幕が付与されているかどうかを確認する、ノートやパソコン画面を見ながら講義に参加する学生のために、指示代名詞を使わず、具体的な名詞を使うなどが含まれますが、何よりも大切なことは聴覚障害学生を障害のゆえに特別扱いしないという点です。ノートテイクを含む学生への支援は、決してその学生の成績を保障するものではありません。そうではなく、障害のあるなしにかかわらず、授業に参加する権利をもつ全ての学生に、その機会を平等に提供する仕組みなのです。

執筆者 太田晴康(おおた はるやす)

静岡福祉大学社会福祉学部教授

(2008年10月26日 第4版)

注：本文中でも触れたが教育機関におけるノートテイク活動は、社会福祉サービスの「要約筆記」活動と同一ではない。身体障害者福祉法施行規則に明記される法定事業としての要約筆記は所定のカリキュラムの修了者を登録条件とし、障害者の地域生活支援事業を推進する担い手として位置づけられている。したがって教育機関独自で、文字による情報保障者を養成する場合は、要約筆記の名称ではなくノートテイクがふさわしいと思われる。

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当：白澤麻弓 E-mail [pepj-info@pepnet-j.org](mailto:pepj-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japanは筑波技術大学の運営による高等教育機関間ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成によるTipSheetを参考に、PEPNet-Japanが独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。

**PEPNet-Japan**  
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク  
筑波技術大学

## PEPNet-Japan TipSheet

# パソコンノートテイク その特徴と活用

⑨

### 文字による適切な配慮

近年、注目されているノートテイク(notetaking)にパソコンを活用する方法があります。比較的、歴史が新しいだけにパソコン通訳、パソコンテイク、パソコン要約筆記など、さまざまな名称で呼ばれます。いずれにしても市販のノートパソコンを活用し、ノートテイクがキーボード入力によって、音声で文字化し画面に表示する点は変わりません。この TipSheet では、パソコンノートテイク(computer-assisted notetaking)という名称に統一します。キーボードを素早く入力できる人であれば、手書きの3倍以上の情報を伝達することができます。したがって、多くの情報を素早く得たいという学生の要望に応える方法であり、専門用語が頻出する大学の授業では、かな漢字変換ソフトの単語登録機能や専門辞書の活用といった工夫によって大きな威力を発揮します。

パソコンノートテイクには、1人の入力者が教員の話を受約しながら入力し、LAN(ローカルエリアネットワーク)接続した利用学生のパソコン画面に情報を表示させる「1人受約入力」と、2人の入力者が話しことばを聞きながら、数文節ごとに連係入力し、LANを通じて情報を伝える「連係入力」の2つの方法があります。

連係入力では、AさんとBさんが次のように入力文(下線部)を分担します。

・Aさんの入力例：前回の講義では、学習の行動主義的な理論について、

・Bさんの入力例：さまざまな学説を紹介しましたが、

・Aさんの入力例：今回からは認知理論を扱います。

・その結果、表示される文字列：

前回の講義では、学習の行動主義的な理論について、さまざまな学説を紹介しましたが、今回からは認知理論を扱います。

一方、1人受約入力では話を簡潔にまとめていくことから通常、次のような要約した文字列(下線部)を入力表示します。

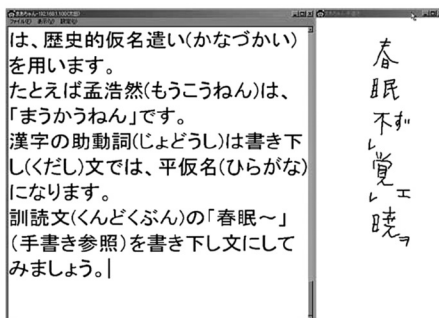
・1人受約入力例：

今回は学習の行動主義的な理論に関する学説を紹介したが、今回からは認知理論を扱う。

入力した文字列をLAN接続した利用者のパソコンに送信するためには送信用ソフトを活用します。なお入力者が文字列を確定すると同時に素早く利用者へ送信する機能、

手書き文字や図形を送信する機能、そしてルビを簡単に振るといった機能に特化したソフト「まあちゃん」(下図は表示画面の例)は次のサイトから入手できます。

<http://www006.upp.so-net.ne.jp/haruyasu/newpage31.htm>



### その他のフリーソフトと入手サイト

IPtalk : <http://iptalk.hp.infoseek.co.jp/>

tach : <http://www2t.biglobe.ne.jp/~yusuitei/soft/>

rtd2 : <http://hp.vector.co.jp/authors/VA006163/pccap/soft/>

パソコンノートテイクでは、パソコンを立ち上げて文字を入力するといった基本的な知識に加えて、次のような専門的な知識と技術が必要とされます。

### (1) 素早い文字入力操作

手書きの筆記速度は漢字がな交じり文に換算しておおよそ1分間あたり60~80字程度です。一方、パソコンの場合はタッチタイピング(手元を見ないで入力)ができるようになれば、最低でも手書きと同じぐらいの速さで文字を入力することができます。しかし、それだけではパソコンノートテイク活動は難しいでしょう。ミスタッチがあるとその訂正に気を取られ、話を聞くことがおろそかになるからです。そこでミスタッチのない入力操作に習熟することに加え、1人で話を要約し入力するためには1分間あたり100字(ミスタッチを除く)以上の入力速度が望ましいでしょう。また、連係入力の場合は、最低でも120字/分の速度、理想的には180字/分の入力速度が要求されます。

### (2) ソフトの機能の活用

日本語を入力する際には、ソフトの機能を最大限に活用します。専門用語や頻繁に登場する言葉を単語登録しておけば、それだけ効率的に入力することができます。たとえ

ば、発話者を明示する「先生／」という文字列を「s1」というキーワードで事前登録しておくといった工夫です。また、ATOKであれば省入力機能を活用することによって、繰り返し登場する言葉をわずかなキー操作で再入力可能です。

### (3) LAN(local area network)の知識

パソコンノートテイクでは通常、障害のある学生のパソコンに文字データを送信しますので、パソコン同士の間でデータを送受信するための設定をおこないます。(「まあちゃん」のサイト中、「簡易マニュアル利用用」参照)

### (4) 話をまとめる力

1人要約入力では、話を聞きながら簡潔な文章にまとめると同時に、並行して素早く入力を表示する技術が必要です。また90分を1人で入力し続けるコツ(手に負担をかけない入力方法や集中力)も身につけることが望ましいといえます。なお連係入力の場合でも、非常に速い話を文字化する際には、意味上のかたまりごとに1人で要約し、入力表示するという工夫が求められます。

## 1人要約入力と連係入力

パソコンノートテイクにおける連係入力では、どの程度の文字量を入力表示できるのでしょうか。仮に入力速度180字/分の入力者が2人で連係した場合、おおよそ1.5倍、約270字/分の文字量を入力することが可能です。つまり、よほど早口の授業でなければ、1分間あたり250~300字ぐらいの発話速度の授業であれば、感嘆詞や間投詞を除き、語尾を省略するといった工夫により、ほぼ話の内容のすべてを文字化できることになります。と同時に、次の点を忘れてはなりません。

音声を通じた理解は必ずしも文字を通じた理解と一致しません。話しことばでは音による強調や抑揚、間を活用しますが、それらを文字化することは不可能です。したがって、ノートテイクは話しことばと書きことばのメディアとしてのちがいを意識しなければなりません。話しことばをそのまま文字化したからといって、話しことばに含まれる情報が正しく伝わるとは限らないのです。

一例ですが、たとえば音声で「オアッス」と言ったとしましょう。聞き手は、その場の状況によって「おはようございます」を縮めて言ったのだと理解するでしょう。あるいは、東京の下町言葉「ナナコタネ工」という音声を「そんなことはない」と理解します。音声認識ソフトが音声を完璧に文字化できない理由の1つもこの点にあります。

また、話しことばでは文章化したときに句点のない、したがって一読するだけでは理解しづらいセンテンスが延々

と続くことがあります。「～ですけれども」や「～が」といった接続助詞が論理的な機能を果たさず、口癖として用いられるという点も話しことばの特徴でしょう。

さらには文字情報特有の限界もあります。文字で書かれた「ばか」は、「軽蔑するような調子」や「かわいい」という気持ち、あるいは「軽い気持ち」をこめて、幾通りにも表現することができますが、その表現は「ばか」という文字からは伝わりません。要は、話しことばを書きことばにしているときは、音を文字にするのではなく、意味を文字にしているということ、一つ一つの音声が一つ一つの文字に対応するとは限らないということです。そうした特徴に注意を払った上で、何よりも大切なことは利用者の要望にそって手書きのノートテイクと1人要約入力によるパソコンノートテイク、そして連係入力によるパソコンノートテイクという3通りの方法を活用することが求められます。「初めに要約ありき」でもなく、「文字量が多いほどよい」わけでもなく、要は利用者の自己選択と自己決定を可能にするサービスメニューが用意されていることこそが重要なのです。

	情報量と特徴	求められる能力	運営上の課題
手書き	話しことばの約2割。箇条書き、体言止め、略号等を活用。	読みやすい筆記。要点と構造を理解し、構文を作成する力。	支援者が集まりやすいが、定期的な技術研修が欠かせない。
PC 1人要約	話しことばの4~5割。読みやすさに配慮した表示。	PCを筆記用具として使いこなす力。ある程度、要約する力。	PC操作の熟練者を対象にノートテイク技術を指導する。
PC 連係入力	話しことばの6~8割。話しことばにそった多くの情報量。	120~180字/分の素早い入力速度。連係作業の熟練。	必ず2人が必要。速い話では不整文が現れることもある。

## ノートテイクの評価

パソコンが伝えた内容に基づいて、利用学生は受験し、単位を取得します。そこでノートテイクの入力した内容を評価する仕組みが欠かせません。次のような点を自己評価、他者評価を通じて確認しましょう。

- ☐ 重要な語句を入力表示したか。
- ☐ 意味のとりちがいがいや誤解がないか。
- ☐ 文法のまちがいが少ないか。
- ☐ 正しい漢字や英字等の表記。
- ☐ 要旨を的確に伝えているか。
- ☐ 携帯電話の音や校内放送等、その場の空気を変えるような音情報を入力表示したか。
- ☐ 守秘義務等、ルールに基づいて活動しているか。

執筆者 太田晴康(おおた はるやす)

静岡福祉大学社会福祉学部教授

(2008年10月26日 第4版)

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当:白澤麻弓 E-mail [pepj-info@pepnet-j.org](mailto:pepj-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japanは筑波技術大学の運営による高等教育機関間ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成によるTipSheetを参考に、PEPNet-Japanが独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。



## PEPNet-Japan TipSheet

⑬

## 聴覚障害学生の心理的支援

## さまざまな聴覚障害学生

聴覚障害は、失聴の時期や聴力の程度、受けた教育等によって、その状況が一人一人大きく異なります。それゆえ、コミュニケーション手段も必要なサポートの種類も実にさまざまです。また、同じ一人の聴覚障害者でも、聴力の変動や意識の変化にともなって、必要とするサポートが変わっていくこともあります。とりわけ、手話を習得したり、同じ聴覚障害のある仲間と出会ったりする機会の多い大学時代には、2年間もしくは4年間のうちにめざましく変わっていく聴覚障害学生も見られます。

## 支援がもたらす心理的葛藤

このような過程では、「入学時はほとんど話さなかった学生が楽しそうにおしゃべりようになった」「サークルのリーダーになった」といった学生相応の成長も見られますが、同時に、「いくらすすめても通訳を依頼しない」「話し合いの席にすら来ない」と、拒絶的な態度を示されることも多々あります。

現時点では、大学に入ってはじめてサポートを受ける聴覚障害学生が大半ですので、未知の経験に対する戸惑いが大きく、最初からスムーズに支援に入っていける学生はまれです。また、サポートを受けて授業を理解できるようになる半面で、サポートによって自分の障害とも向き合わざるを得ませんので、心理的葛藤を避けれません。一年生の時から「自分は聴覚障害がありますのでサポートをお願いします」と意思表示する学生は少数です。ましてや「読みにくいからもっと大きな文字にして」「この授業には手話通訳を、あの授業にはパソコン通訳を」と注文する学生は珍しいでしょう。時には勉学が手につかなかったり、それまでの生き方を疑ったりするほどの心理的負担を感じることもさえます。

つまり、授業がわからなくて困っているとはいえ、嬉々とサポートを受ける学生ばかりではないのです。はじめは喜ばれたサポートも時間とともにだんだん要求がレベルアップしていきがちです。必要と思っただけのサポートが必ずしも喜ばれるわけではないところに、サポートの難しさがあると言えるでしょう。

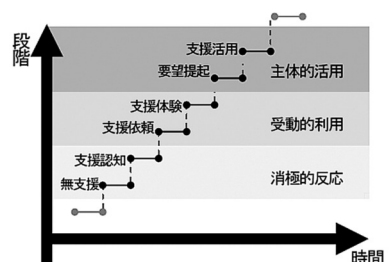
一方で、この時期に良質なサポートを受けることが、聴覚障害学生の精神的成長においてきわめて大切なことも事実です。サポート利用上のルールを守らない、手話以外のコミュニケーション手段を拒むなど、反発的な態度に出会う例も少なからずありますが、そこでの見守りや働きかけが、聴覚障害学生のまわりへの信頼感をかううじてつ

ないていくとも言えます。

## 心理的葛藤から主体性形成へ

サポートを受ける中では、具体的にどのような心理的葛藤が生じるのでしょうか。すべての聴覚障害学生が同じように感じ、受けとめているわけではありませんが、大きく以下の3つの段階に分けられ、ステップを追っていく点では共通していると考えられます。

- (1) 消極的反応段階：支援を躊躇、拒否する段階
- (2) 受動的利用段階：受け身で支援を受ける段階
- (3) 主体的活用段階：自ら積極的に活用する段階



聴覚障害学生の支援に対する受けとめ方の変化

## (1) 消極的反応段階

- ①無支援：支援があることすら知らない状態です。
- ②支援認知：「手話通訳」「パソコン通訳」等の手段があることを知ります。しかし、高校まで一人で頑張ってきた聴覚障害学生には「自分は人に助けてもらうほど困っていない」「支援がなくてもやっていける」と思いがちです。また、「依頼しようかどうか」と迷っているうちに、4年間で終わってしまう学生もいます。

## (2) 受動的利用段階

- ③支援依頼：やっと通訳依頼にふみきります。が、ここでも「まわりに聴覚障害を知られたくない」「隅っこの方で目立たないように」等の葛藤を抱えがちです。
- ④支援体験：はじめて通訳をつけてみると多くが「授業ってこんなに面白かったのか!」と感激します。経験を重ねるとともに次第に「もっとたくさん情報を流してほしい」と要求が高まりますが、実際にそれを口に出すまでには時間がかかることが多いでしょう。

## (3) 主体的活用段階

- ⑤要望提起：これまで受け身だった通訳に対して、ようやく自ら要望を出します。まさしく、情報保障の「依頼者」から「利用者」に転換していくときと言えるでしょう。そ



れまで我慢を重ねたあまり、強い言い方で要望を突きつける学生も少なくありません。

⑥支援活用：通訳者や支援者との距離のとり方を身につけていきます。「この授業にはこの手段を」と判断したり、まわりの先生や友達に配慮してほしいことを適切に伝えたり、通訳者にタイミングをつかんで声をかけたりすることができるようになっていきます。

### 各段階に応じた支援

それでは、大学としてはそれぞれの段階に応じてどのような支援を心がけたらよいのでしょうか。

#### (1) 消極的反応段階での支援

ある大学では、聴覚障害の新入生に「どのようなサポートが必要ですか」と聞いたとき、「口話でわかりますから大丈夫です」と返ってきました。先生から「入学前に一度授業を見に行ってください」とアドバイスしたところ、「やはり口話ではわかりませんでした」と、実際にどうするか話し合いが進んだとのことでした。

また、他のある大学では、「本人はサポートを断っているが、一度、授業に通訳をつけて様子を見たい」と、動いたところ、本人も一年が経つ頃には積極的にようになってきたという例もあります。

本人の拒否する気持ちを受けとめつつも、「いいですね」という言葉をうのみにせず、潜在的ニーズを引き出す丁寧な対応が効果的だとと言えるでしょう。

#### (2) 受動的利用段階での支援

聴覚障害学生から「〇〇してほしい」と声があがっていないから大丈夫かなと、安心しがちな時期です。通訳に対してどう感じているか、あらためて話し合おうとすると、なかなか反応を得るのが難しいかもしれません。たとえば、養成講座では実際に通訳の様子を見ながら、聴覚障害学生に「この通訳はどう？」とさりげなく聞くと意外な答えが返ってくることもあります。本人にとってはやっと出た一言ですので、このときに「でも…」と反論することは避けたいものです。

また、同じように通訳をつけて授業を受けている聴覚障害学生同士で「通訳についてどう感じるか」議論する場があると、なおよいでしょう。自分の思いが個人的な好みによるものなのか、ほかの聴覚障害学生にも共通する感情なのか、見極められるようになります。

#### (3) 主体的活用段階での支援

ここにきて、ようやく一方的に支援を受ける段階を脱して主体的に動き始めます。不満が噴出しやすいときですが、自分の要求を言語化した証として受けとめていきたいところです。ときには無理難題を突きつけられることもあるかもしれませんが、そのような場合を含めて、全ての要望をのむ必要はありませんが、「無理」と却下するのではなく、

「それは〇〇という理由で難しいけれど、こういう方法はどうか」と、大学として代替案を示すのが大切になるでしょう。

お互いの要望や事情をすり合わせて、建設的に話し合い、折り合っていく過程が、聴覚障害学生にとっても自信となっていくようです。

概して、既存の支援にはない新しい要求を出す学生や、一つの支援に多くを求める学生は、後々、支援を受ける立場から自らも後輩を支援する立場へと回ったり、支援者の養成に積極的に関わったりする例が多くみられます。ここも長い目で見守りたいところです。

### 全段階を通じての支援

日ごろからの関わりだけでなく、全段階を通じて大学と聴覚障害学生が定期的に（年数回）話し合う時間が持たれると、互いの安心感や信頼感がより深まることでしょう。

大学にとっては、聴覚障害学生の本音を引き出すのは一仕事かもしれません。大学の事情が許せば、数々の聴覚障害者と接してきた通訳者なり聴覚障害者なりを支援スタッフに迎えるのが望ましいでしょうが、それが難しい場合でも、こちらのPEPNet-Japanなどのネットワーク等を活用して他大学と情報交換することで「(1) 消極的反応段階での支援」で述べた例のような支援も可能になるでしょう。

強調しておきたいのは、同じ聴覚障害の仲間（ピア）を持つ大切さです。大学生ならば、「全日本ろう学生懇談会」「関東聴覚障害学生懇談会」等で討論会、講演会、キャンプ、スキーなどの企画が行なわれていますので、折をみて「こういう企画があるみたいだね」と伝えるとよいかもしれません。卒業後、職場や家庭で何らかの問題が生じたときも、学生時代に培った同じ聴覚障害者のネットワークが大きな救いになってきます。

ケースによっては、まれに、聴覚障害に造詣の深い心理専門家による支援が必要な場合もあります。現時点では、このような専門家は限られていますので、都道府県の聴覚障害者向け情報提供施設に問い合わせるのも一つの方法です。

聴覚障害学生にとって、さまざまなコミュニケーション手段を身につけることが人間関係の幅を広げるように、さまざまな手段の支援を活用していくことが、社会的活動の場を広げていくことになります。社会的活動をより充実させていくためにも、支援によって生じる心理的葛藤を軽減するとともに、質の高い通訳を提供していくこと、きめ細かな支援コーディネートをすることが、非常に大切になってきます。

執筆 吉川 あゆみ（よしかわ あゆみ）

関東聴覚障害学生サポートセンターコーディネーター  
(2008年10月26日 第3版)

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当: 白澤麻弓 E-mail [pep-info@pepnet-j.org](mailto:pep-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japanは筑波技術大学の運営による高等教育機関間ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成によるTipSheetを参考に、PEPNet-Japanが独自に作成したものです。本シートの内容の無断複製・転載を禁じます。



## PEPNet-Japan TipSheet

⑪

## 授業における教育的配慮

## 聴覚障害学生への情報保障の意義

聴覚障害学生を対象とした情報保障について「なぜ特別扱いをするのか」といった声を聞くことがあります。しかし聴覚障害学生の立場でみれば、授業に出席しても情報保障がなければ教員等が発する音声か聞き取れず、ただ教室にいただけという状況に陥ります。車椅子の人がスロープなしには建物にアクセスできないのと同様に、聴覚障害学生は情報保障なくしては授業に“参加”することができないのです。学生は当然ながら授業に参加する権利があり、これを保障することは教員や学校の責務です。

## 一般的な留意事項

## ●聴覚障害学生のコミュニケーション特性

聴覚障害学生にあっても障害の程度や生育環境によりコミュニケーションの特性には個人差があります。詳しくは他シートに譲りますが、情報保障の具体的な方法は個々の学生に即して検討する必要があるため、授業に先立ち、学生本人および情報保障者に確認しましょう。

## ●聴覚障害学生との対話

授業以外の場で聴覚障害学生と対話する際は、通訳を介さず、直接コミュニケーションしましょう。このことは教員と学生との信頼感を高めることにつながります。学生の発話がわかりにくいときは、わかったふりをせずに言い直しや筆談を求めましょう。また学生の様子を見ながら話し、伝わっていないと感じたときには躊躇せずに書いて伝えましょう。

## ●補聴器の限界

重度または最重度の聴覚障害者は、補聴器をつけても話しこばを聞き取ることは困難です。また、一対一の対話では補聴器を介して話しこばを聞き取ることができる学生であっても、離れた距離での話し声や騒音がある中での聞き取りは困難になります。教室では教員と学生が離れているのが一般的で、板書の音、紙をめくる音、学生同士の話し声など様々な音が充満しています。したがって聴覚障害学生が補聴器を装着していたとしても、授業においては視覚的手がかりが必要であると考えべきです。

## ●学生自身の情報保障に関する意識

障害に対して十分な配慮がある授業に参加したことのない聴覚障害学生の中には、高校までの経験から、授業は分からなくても「仕方がない」、勉強はテキストを使って「自分ひとりで」行うものと考えてる者もいます。

しかしテキストに頼らない大学の授業ではそのような訳にはいかず、情報保障の必要性に気付いた時には多くの授業の単位を落としてしまっているということも珍しくありません。このような事態に陥らないよう、新入の聴覚障害学生に対しては、情報保障のある授業を体験したり、情報保障に関わる講習や会議などに参加したりする機会を与え、その有効性や方法について、理解を促すことが肝要です。

## ●情報保障の役割と範囲

授業内容を学生に理解させることが教員の責務であるとするれば、授業内容を伝える情報保障者はその教員を支援していることとなります。授業では、全ての音声情報が情報保障の対象であり、教員の発言のほか、学生の発言や聴覚障害学生自身の発言も保障される必要があります。また冗談や授業内容に直接関係のない挿話なども、授業の雰囲気や教員の人柄を把握する上で欠かせない情報です。このことを念頭に置き、通訳環境には十分に配慮しましょう。

## 授業における留意事項

## (1) 講義形式の授業

## ●座席位置の配慮

・教室前方で、教員、黒板、スクリーンなどすべての視覚情報が見やすく、情報保障者が教員の声を聞き取りやすい場所が望ましい座席です。

・情報保障が付く場合は、学生本人と情報保障者とで話し合って、適切な座席を確保しましょう。

## ●教員の話し方

・いくつかの従属節をとまなう文は内容が曖昧になりがちです。不要なことを省き、短い文で話しましょう。

・早すぎる話し方はノートテイクや手話通訳者が追い付けません。ややゆっくり、明瞭に、しかし大げさでなく自然に、そして文の切れ目で間を空けるように話しましょう。

・話者の口の動きから話の手がかりを得ようとする学生に対しては、板書しているときは説明を止め、書き終わってから正面を向いて話しましょう。

## ●板書

・視覚教材が用意されていない部分では、項目やキーワード、新出の専門用語、固有名詞、数式などは書き示しましょう。

・授業展開における時系列や文脈が分かるよう板書のしかたを工夫しましょう。

・連絡事項や注意事項の板書は聞こえる学生にとっても確認になります。



### ●資料などの教材とその説明

- ・聴覚障害学生は「聞きながら見る」ことができません。机上の資料と前方の通訳者を同時に見ることも困難です。レジュメや資料の説明をする際は、説明箇所をパワーポイントやOHPで示したり、学生が読む時間を与えた後に説明するようにしましょう。
- ・情報保障者には、配布資料や使用する教材を事前に提供しましょう。

### ●音声をともなう教材の使用

- ・語学におけるヒアリング教材や音声教材の使用に際しては、文字等に変換した資料などの代替教材が必要です。
- ・教材を使用する際には、教材の音声にかぶって説明をしないようにしましょう。
- 映像教材の使用
- ・ビデオは、音声を字幕化するか文字化した資料を事前に渡しましょう。要旨や項目だけでも有用です。
- ・教室は完全に暗転させず、手話通訳やノートテイクが見えるようにある程度の明るさを残しましょう。

### ●授業の展開

- ・授業の冒頭に、その日の授業で扱う項目を示すことは、聴覚障害学生や情報保障者だけでなく、聞こえる学生の内容理解をもうながします。
- ・授業の最後に授業のまとめや要点を示すことで、学生が授業内容を復習することが容易になるでしょう。
- ・時間配分が適切でない授業、特に授業の後半に時間が足りなくなり授業の進め方を早めるといった授業は、情報保障が追いつかなくなるだけでなく、全ての学生にとって内容理解が困難になります。

## (2) ゼミ形式の授業

### ●座席位置の配慮

聴覚障害学生から全ての発言者が見渡せ、かつスクリーンやホワイトボードおよび情報保障が受けやすい配置を工夫しましょう。

### ●司会と進行

- ・司会者および参加者は以下の点に留意しましょう。
- ・複数の人物が同時に発言すると、通訳等が付く場合でも情報保障はできません。ゼミでは必ず司会者を立て、一人の発言が終わってから次の人が発言するようにしましょう。
- ・司会者が発言者を指さしたり、発言者に手を挙げてもらおうといった方法で、発言者が誰かがわかるようにしましょう。
- ・誰の発言であるかが通訳等を通してきちんと伝わるように、話し始める前に自分の名前を明示するようにしましょう。

- ・通訳にはタイムラグがあるため、中断のない進行では情報保障が追いつかず、聴覚障害学生は発言するタイミングを失います。発言者は、直前の発言が伝わったことを確認してから発言を開始しましょう。
- ・FM補聴器を使用する場合は、発言者にマイクを使って発言してもらいましょう。
- ・司会者は必要に応じ発言の要旨を復唱しましょう。
- ・レポート発表者は、発表原稿や配布資料を用意したり、読み上げる箇所を明示したりするなど、分かりやすい発表方法を工夫しましょう。

## (3) 体育などの教室外の授業

### ●説明と活動

- ・身体活動をしながら説明を聞くことは困難なため、説明と活動の時間を分けましょう。ただし体育などで教員の模範演技を真似ることにハンディはありません。

### ●指示の伝え方

- ・屋外などの広い場所での指示は、近くにいる聞こえる学生を通して知らせたり、パディシステムを採用するなどの工夫をしましょう。

## (4) 実験や実習

- ・実験の時などは指示した物や手順を聴覚障害者が確認する時間を与えましょう。
- ・課題の指示に際しては、実際のデモンストレーションをともなうと理解が促されます。
- ・聴覚障害者が参加することが困難であると思われる実験、実習は、まず補助者を付ける等の措置で参加する可能性を検討しましょう。
- ・聞こえないことで明らかに生命の危険を伴う事柄については、どのような事態が予測されるのかを学生に対して十分に説明しましょう。また危険が予測される活動を除いての参加について、学生とともに検討しましょう。

### 執筆者

石原保志 (いしはら やすし)

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター教授  
(2008年10月26日 第3版)

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.org>

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 担当: 白澤麻弓 E-mail [pepj-info@pepnet-j.org](mailto:pepj-info@pepnet-j.org)

PEPNet-Japan は筑波技術大学の運営による高等教育機関間ネットワークで、文部科学省特別教育研究経費により運営しています。

本シートは、PEPNet-Northeast(アメリカ北東地区高等教育支援ネットワーク)の作成による TipSheet を参考に、PEPNet-Japan が独自に作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。

